

曾路名所圖會 一



42

20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 130 1 2 3 4 5

かきつばたのうらみは
かきつばたのうらみは
かきつばたのうらみは
かきつばたのうらみは
かきつばたのうらみは
かきつばたのうらみは
かきつばたのうらみは
かきつばたのうらみは
かきつばたのうらみは
かきつばたのうらみは



此は松筠齋主人の
書

文正二乙丑三月

文章博士菅原尚長卿

松筠齋主人題

松本...
...
...
...
...
...
...
...
...
...

Handwritten text in a cursive script, likely a form of Urdu or Persian, consisting of approximately seven lines of text.

Handwritten text in a small box, possibly a page number or a specific marker.

Handwritten text in a cursive script, likely a form of Urdu or Persian, consisting of approximately seven lines of text.

予の地味から世に人々を
つとめりておのれを
かたし

文化二年二月

富士谷成元

子

岐阻路名所圖會自序



岩屋姫美をそふ者うるまむしき海もきし海
馴り社に月ツケあう海に社を築く乃古海に
心せり凡六十九のむちを社道とせば木曾路平
おもむく此道とてを續紀小大寶二年之路圖
岐獲路に記しとてあきとこしうたし路も多小
日本武尊碓日さうけあう海満とて橋船を
養ひ来たすし科濃よひて路をわん又古事紀あり
何の心かこ甲斐より科地におもひた海と

志留系李の御しおもはふ久安やうたうり
見えあり二代實録ハ 詔かうけくた馬権か元
従六位上藤原正範御長みゆり給ひて木曾を
之野國と定らるゝも皇宇海と名瀬かうそみ
まらも改て中可うらうたのやみまかるる女此
木曾と詠せまふ今をいりへるもかゝ祭を
道原山伏屋の御おまもり来共あゝ尾はり
姨捨山も道より遠く梯はりも今は安あうたも
何れも高貴もゆきり給ふとうり小舟の滝此

おのほらうらるそと度度見の床此無かゝり
と塔の御を名のと桔梗の原のほく田畑をかり
諏方此湖水の橋ハ早振神此りて祭を名ん
古流も糸島寄り富士の乳を留めふらるる諏方此
神事の御射山の保屋の事此新風おそくと
鹿の御備をふ事御嶽のやゝ馬駒うり計
和田うりけのまかゝる飛鷹川のふるまをりある
将丹原の心をハくり給祭ぬ海筒山此あを
碓氷此段を備やう此尾のわりり妙美山ハ

きりもーも多しんん人のふるふ補ひ
結りなふをさるねんとのと

文化えきの入子の九月

秋里 竹籬 名山



木曾序六

凡例

- 一 岐阻路名所圖會と所謂東山道なり今俗小中山道とをいふ京師より起るく江戸に到ふ都て近江美濃信濃上野武蔵等五箇國乃道條方米を種と吾蘓街道より六十九駅道法百三拾五里餘なり名所古跡神社佛圖を圖會といふ駅を各圖をのりて歌一行程と其下を著ん
- 一 京師より某津の駅をてと東海道名所圖會小抄ゆまはあく小首畧して其後をる瓜補ふ其より嚮を先編の例とゆゑ記し街道乃神社と延喜式神名帳を載ふと選ぶ
- 一 志るん又大慶よりつりていふ小あはは所禰御嶽野嶽あは
- 一 渾る方位をふにふの前位は循つて某の東何里某を小何町小ありを證し又神社佛圖乃左右を其神本

木曾路名所圖會卷之一

目錄



- 内裏舞御覽御圖
- 栗田山
- 追分
- 用清水
- 唐崎松
- 勢国長橋
- 草津
- 檜觀音
- 三上山
- 鏡山
- 大津
- 矢橋渡口
- 石山寺
- 大寶社
- 野洲川
- 篠原社
- 鏡宿
- 洛三條橋
- 御廟野
- 蟬丸社
- 以禮親喜
- 膳所城
- 野路玉川
- 守山
- 布晒
- 平宗盛墳
- 牛若丸投宿家
- 白川橋
- 四宮河原
- 開寺
- 三井寺
- 栗津原
- 矢倉
- 守山寺
- 御上神社
- 蛙石鳴池
- 長者碓

その左方なり又道條左の方なりこと江京所より東國小
 赴く旅者の左なり

一 五卷六卷の江戸より東に到る香取鹿島流波山日光等の
 名所とあるに波蘇圖會附録も備ふ

一 日光山と貝原氏泰階記あるに彼地もて善山後盡又日光
 名勝志の茶板を抜華一又古老の後派も格不脱漏ありは
 後人の補遺を候る已

木曾凡例

○鳥居 鳥居 米原道	○不知哉川 鳥籠山	○多賀大社 經藏 末社	○愛知川 愛知川驛	○高宮 高宮 唯念寺 馬墳	○鳥居 鳥居 米原道	○不知哉川 鳥籠山	○多賀大社 經藏 末社	○愛知川 愛知川驛	○高宮 高宮 唯念寺 馬墳	○鳥居 鳥居 米原道	○不知哉川 鳥籠山	○多賀大社 經藏 末社	○愛知川 愛知川驛	○高宮 高宮 唯念寺 馬墳
○鳥居 鳥居 米原道	○不知哉川 鳥籠山	○多賀大社 經藏 末社	○愛知川 愛知川驛	○高宮 高宮 唯念寺 馬墳	○鳥居 鳥居 米原道	○不知哉川 鳥籠山	○多賀大社 經藏 末社	○愛知川 愛知川驛	○高宮 高宮 唯念寺 馬墳	○鳥居 鳥居 米原道	○不知哉川 鳥籠山	○多賀大社 經藏 末社	○愛知川 愛知川驛	○高宮 高宮 唯念寺 馬墳

木曾路名所圖會卷之一目錄

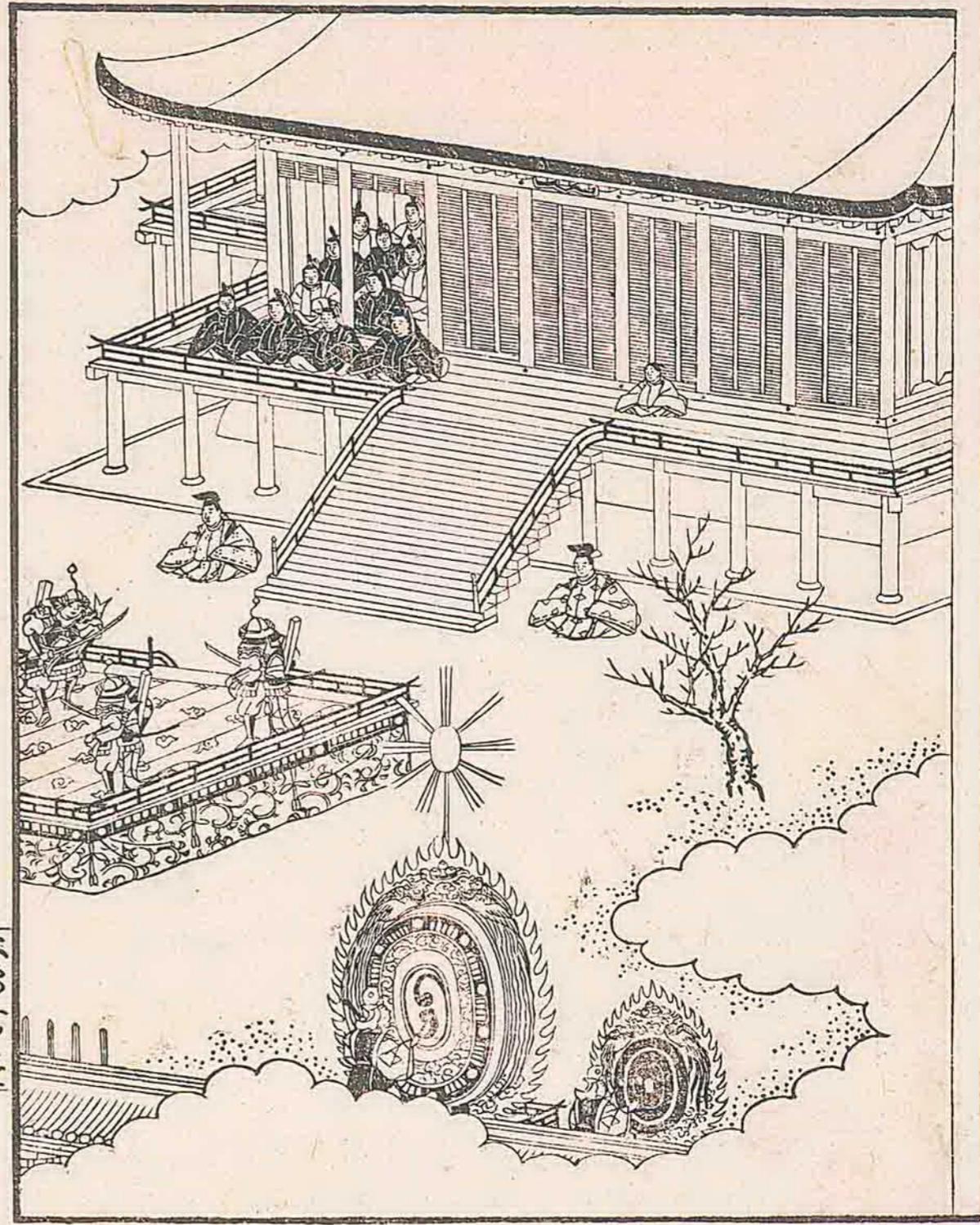
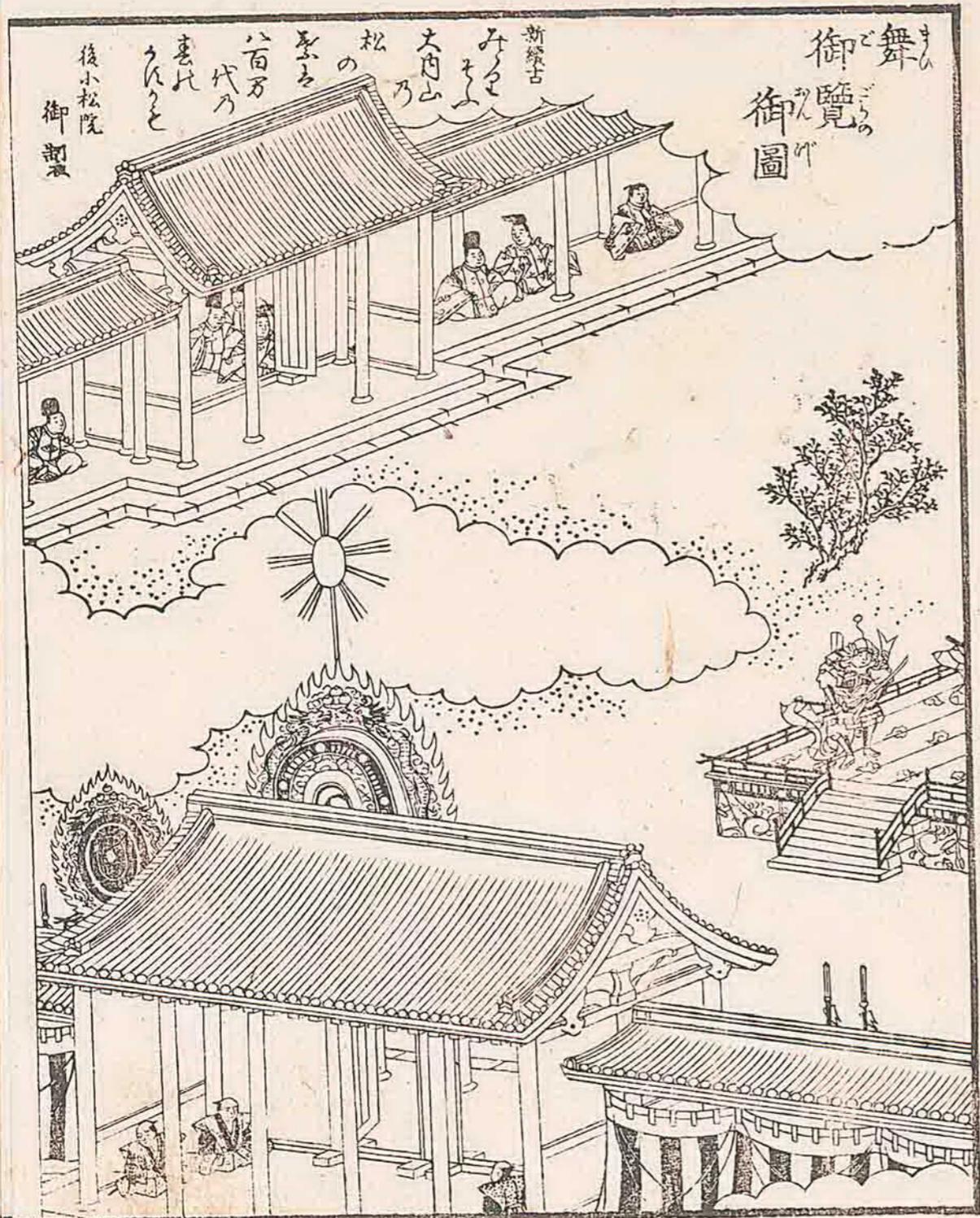
○千々松原 千々松原	○朝妻里 朝妻里	○蓮華寺 蓮華寺	○柏原 柏原	○千々松原 千々松原	○朝妻里 朝妻里	○蓮華寺 蓮華寺	○柏原 柏原
○千々松原 千々松原	○朝妻里 朝妻里	○蓮華寺 蓮華寺	○柏原 柏原	○千々松原 千々松原	○朝妻里 朝妻里	○蓮華寺 蓮華寺	○柏原 柏原

木曾路名所圖會卷之一目錄



見說岐蘇多勝縱山川
 都與蜀中同誰將一部
 好詩料得似石湖兼放
 翁 愚山慎題

本卷二目之二



木曾路名所圖會卷之一

平安 穂里 蘆島 編

東山道 岐蘇路 俗小中山道と云ふは東海道あり

續日本紀云

大寶二年十二月十一日始々吉蘆山の道を開く

和銅六年七月美濃信濃二國の界徑道險阻ありて往還

艱難あり因茲吉蘆路を造る

三代實錄云

元慶三年九月四日辛卯美濃信濃の國縣坂上岑を以て

國の場とせしむ縣坂上岑美濃國惠那郡を信濃國筑摩

郡との間小あり西國古未境界坂相牽くやど交する不

あはれ貞觀中勅して左馬權少允從六位上藤原朝臣正能

刑部少孫從七位上兼直繼雄等造して西國司と地

際と相定む正能等舊記を檢く云吉蘆小吉蘆の西村これ

惠那郡繪上郷の地なり和銅六年七月美濃信濃の西國

本考一武

の場徑路險隘往還甚難を之門々吉蘆路を通は七年因二

月美濃守從四位下益朝臣磨本封邑七十戸因六町を賜ふ

少孫正七位下門部連御之六日從八位上山口忌寸兄人各位

階次進む吉蘆路を通むるとき門々なり今け地美濃の

國府を去る幸仍程十日信濃國に於てハ宮邊邊に於て若

信濃の地せせば何れ美濃の國司於て遠く關入る彼

道を通せしめんや由是正能の定ふ所なり

按ず所ふところより第六百年終小日本武尊の東征の時

難日嶺をて阿豆麻波夜くや二度敷くをてふと日本紀

に見くると又古事紀第六甲斐國に經く科野小知く尾迷

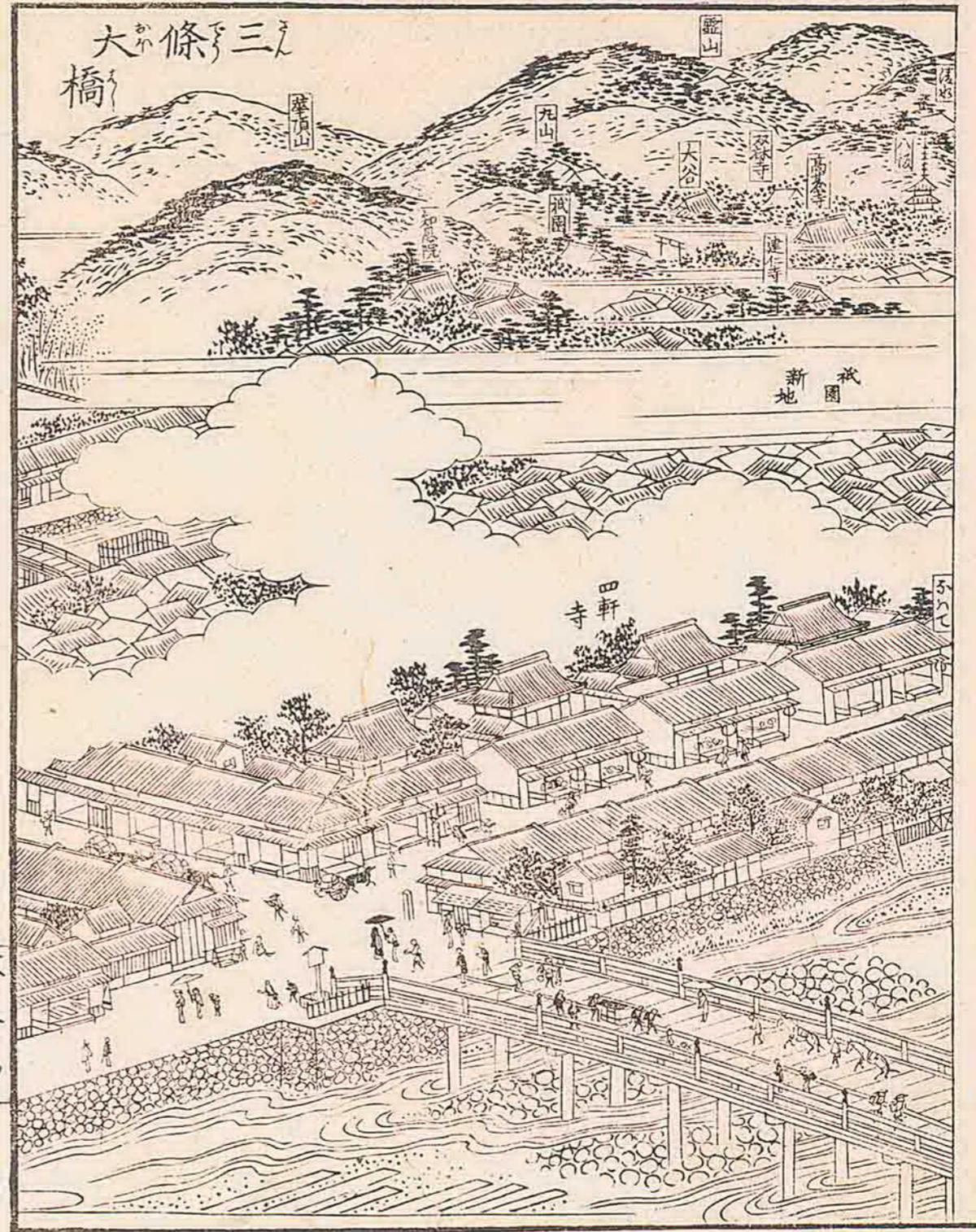
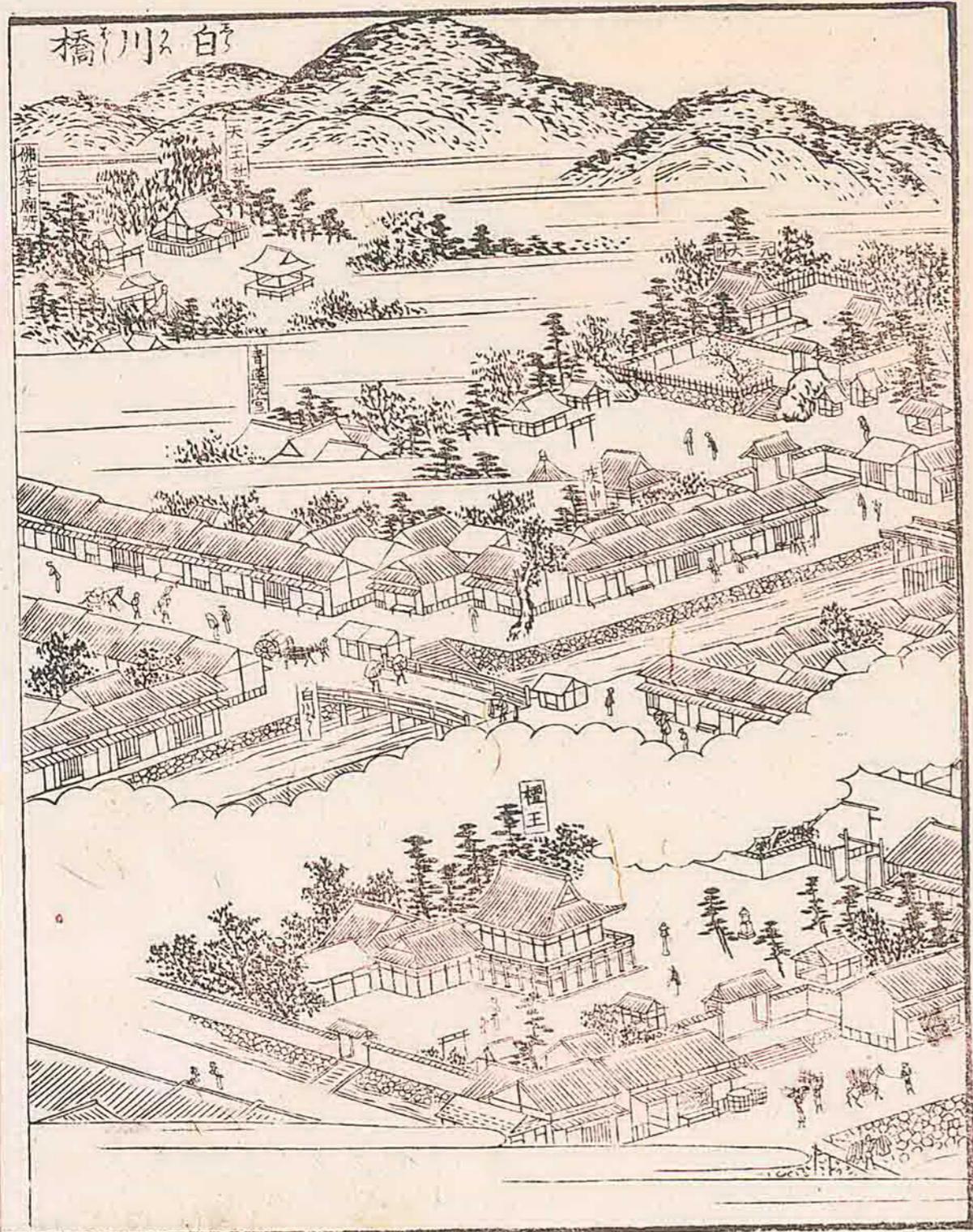
りたり終りておん吉蘆路を延喜中頃より信濃よりや

和奇集より見く

拾遺 中くよひはけりて信濃なる本為橋の橋乃抄る也 源賴光

洛の南風まよふ賀茂の流乃す多雲風坊の橋北よりぬる河東院地蔵ふ
 古物社御所の房小幸之くも伝く名あり申遠近の名と云ふ
 てまが都園舎ははえとつもの畿内をめぐりてあると云ふ
 雲乃おとぐを河乃七年北まぬあつた都に東海園舎を
 ほどくこころはゆる吉原路をゆく江戸より香取麻島筑波山
 城めぐりつけゆくまろくた日光の御宮城お黒敷中登ぬ
 其道芝のたうれお前をたづひてめぐりゆとらひま古橋ふらばて
 繁のおおよく昭とまれば秋の徳やうても側のおおわ道祖神ん
 まねきにありてあくまら二のやれ夏卯花月中の六月とらふ
 日ふ旅まぬまが都の南るれば若集滅道の路より赴んてく
 形く善羽山の道より秋の中山茂たぐり流谷の嶺を越くたしや出く
 山科の里成るぬか乃農家よ様金屑丸てふを目あけて牛尾
 道の別まふいらるこれた友よとわてり小奴葉屋は先祖の斤忌世

を備とて射術の達者より今小市又茶旗成飾ふ北の山北も小安祥
 寺ありこれをまゝ高井堂とて毘沙門堂と傳教大師の冥泰師寺
 勢も伝親王任職のゆふ右小日蓮宗檀林あり護國寺とて諸羽の社
 ありこれと天津児を根今成祀る四宮村小十祿寺あり奉尊の聖親者
 上宮をふれ浄化とてはけより仔細物がつりふある仁明帝弟四宮
 人康親王の棲居ひ山階宮のちや後小寺や形して真慶法印宸
 小任職のゆふ四宮河系袖々庭とて名ありむくくをぬくの物と市
 立ける所とて我又道範てふくふ経より今これを訛りて道晴や
 言の葉店の異名とるれそそより追ふふゆるまの系と伏見への別ま
 道石の標とまろ裏の方小柳緑花紅の文字紙鶴とり
 ひが山乃色打ふ伝家とて相板の帯うらむ敷程ふ駒引つた
 とも月のほも中うくちうたやわねを杖書たちとてわくぬく
 の月げ風づつらりゆはせどりうんか書づれと遊子稚穉月



西のまじり函谷の首をまきりひあらせしむらひし一幡丸とらひたる世に人
 世安のりくまにけりやの床をむすびくはひと琴瑟鼓吹奏て公を
 と命や備とよと御しく思ひをのびり嵐北風しげきばまわつ
 せとけくあまののりく蟬丸き延喜年四の宮あてしう南とゆふ
 せせのあつと四の宮と名づけしうゆらふと

一のつなれ床乃あつ南をむすむらあふは乃案 光り

追分城をまき衛路狭して付身人ごをけ行馬あり南の津あり
 牛車をせりく俵物を積りてき坂とゆる池の側乃針屋を月代とく
 燻氣を敷して針磨さぬといふもの一里塚前の尊盛を其名に
 小車の店大津繪の店あくふありて杜さの名物とくや走井の湯水輝
 丸宮兩國寺むらけ開新の初開明神築堤水き坂をうら然これ
 をせ津々人進の湖をむらうり見く小坂を町をすだて大津
 八町の駅ふりこれ

近 大津

京降よりうら中で三里まきしう
 京津まで三里中六町
 あらむらう一天智の帝大和國飛鳥を和まより津海の志智文勢ふ
 都らひああて大津の宮をけくをのふとくはまぬら宮をた
 の跡をうらやせんく

けり波や大津の宮にあれりり名のとけまら志智文のふり 光り

け駅を都よりけりめての所をれらるや後今人馬まきくをうて燈く
 漢道ののこま津海國よれせり新徳度の花御きまらひ入松出松
 橋の船く大津の町乃敷九十六町ありやらん母うれ宮女のありま
 今の石系氏のありくとせれのけり西ふ三井寺巡禮乃親言
 高親言と迫松寺と号して山の上ふあり長等山とけ山法とくこ
 けく墨燈寺の後とせ押太友守子の殿舎は後小寺にけり
 けりくも園城乃字と用也五別所の神祠と新羅社三尾明神

護法菩薩神新宮推現慈野社金堂の傍に御井あり天智天
武持統三帝降誕の産湯を以て水とて指を以て又清水と云く
三密灌頂乃關伽と云尊三會の曉成期を以てひりて此
名泉ありて寒暑小増減あり梵鐘と金堂の前上壇の地を在
高五尺五寸且四尺五寸五分龍頭を足三寸五分天竺撰
図精舎良の方ふつは所之佛滅後龍宮城ふ入一が延喜乃頃
儀藤を秀御龍の宮よりこれを傳くあり小壽附に食堂に釈迦
佛と安に赤梅櫃の蓋本毘首羯摩天の像に楯例と大鴉あり
口の廣四尺ありとを唐院と智證大陣の建立寺門系創家初の
所之唐の青龍寺に換して中央より智證大陣の像を左より其不動
右より大陣の御骨護摩堂三層塔新山王祠寶藏より大陣像より
將來の寶ありんぐあり十八神祠と南院あり燈幢石壇に金堂
の前ありこれと天智帝遷居入麻を謀りて其罪障と悔く

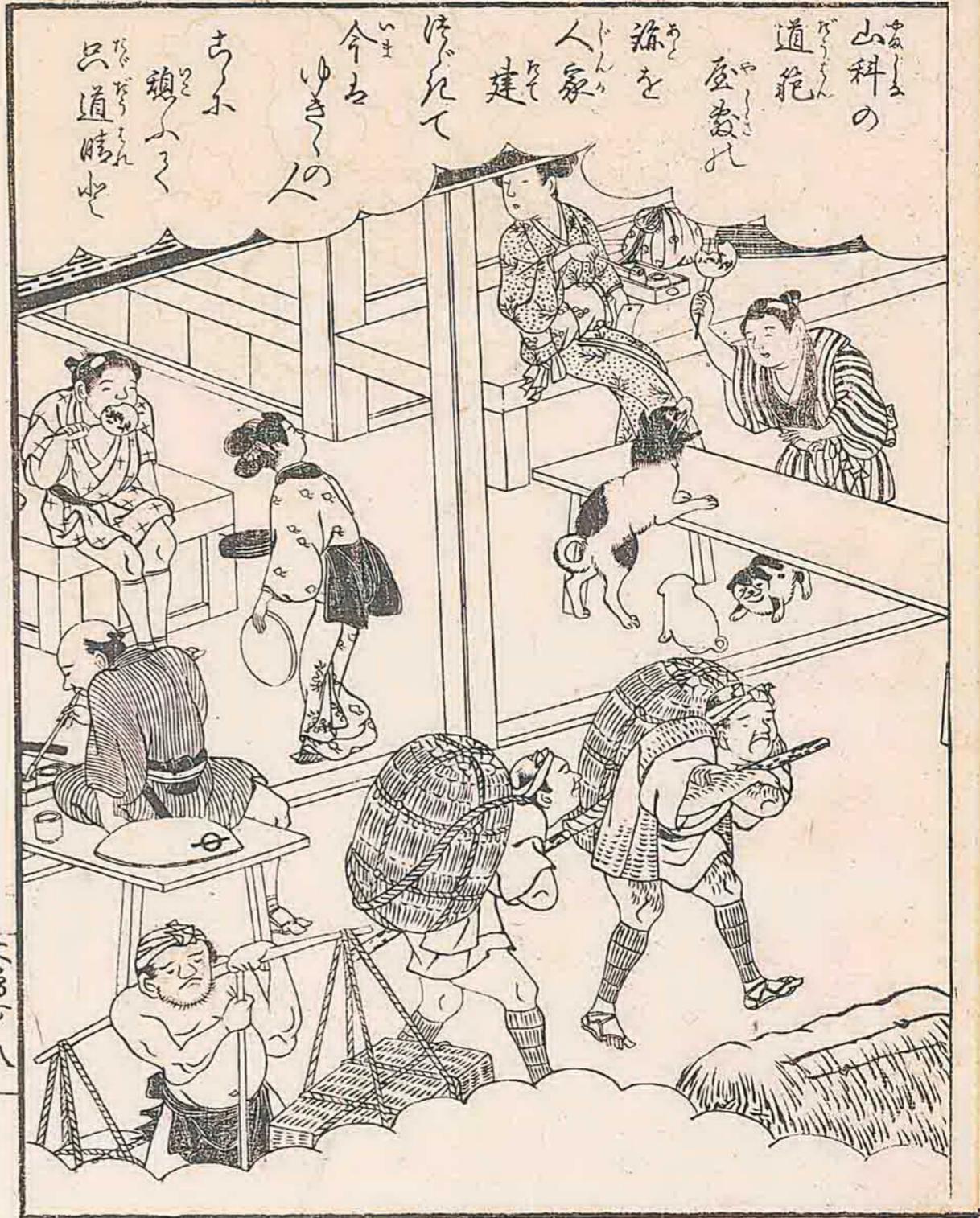
伽藍次第建一眞法供書を撰りて所之經卷より足利寺氏公一切
經を授む自寺の奥書あり又慶長七年より毛利輝元唐幸の
一切經を寄附せし所教待仙人の入定室と金堂の東北より教待
和尚と神通延壽此仙傳より説一百餘卷にして貞觀元年の書
りめて智證大陣と見て南山院附屬に其後石蓋を以て覆ふ其
壽一百六十二卷と云本朝神仏傳より三井寺教待仙人原滋實
郡のより百餘卷と歴りてども容貌壯年小者一常に魚鱗
狀を以て其骨忽然して青白二色の蓮葉とあり正法寺あり
福神あり大慈閣あり寺に良あり経巻附の八勝眼ト云
ありて晴天良竹生鳥朝妻里と云遠く見ゆる五別前と迫松寺
尾藏寺濃妙寺水鏡寺常在寺あり安藝石塔波女八詠橋
の上より阿の早尾の海にあり寺の西にあり山王社一社の内
なり龜丘龜嶺橋村雲橋夜櫻淨明水二王門小院中流南院

中てあり園墓と智院之階ありて天台宗に隆驗道を業るは之階の
 廟堂の比叡山四明嶽あり景行天皇五十八年春二月近江國志賀
 里小都遷つたり由日幸紀より今志賀の郷内西郡村之
 地也清水泉あり極く英妙の地とて皇居の神祇佛國の古跡
 と見らる水の英意より清く今もても賀茂より清く小岩倉
 小智辨あり吉田小明星水黒苔は雲を圍ふ園山小吉水清水寺に
 系清水其外新つた遠ありは浪速あり津城あり黄令水天王
 寺小龜島あり河を流る古跡あり水多し志賀山越る赤塚か
 登りて小白川より出る後賀の花園を新在桑とて新なる一思
 主祠もは里小あり貫之祠も正眞寺村小あり崇徳廢寺の跡
 梵刹廢寺の跡も定るは智光寺の城蹟は赤塚村の上
 にある唐橋北角より海に童神と祀る一松と構のめぐり五郎
 宮サニ丈枝葉のまつり於て貳百圓好は時茶をくして霜雪は成

凌ぐ千葉成常と人の照る朝日くげを松の葉ににみれ浦吹
 夕ぐれ小松志ね色成かまはは處をて松を花より樹あり
 と陰し唯母より引るる子日るる人と後成郷もよみ流る志賀郡と
 志賀郡西郡村小あり字成御前内とて今竹林の中小清水あり
 これ其頃の遺跡

古事記云

若帶日子天皇天城坐近淡海之志賀
 高穴穗宮治天下也此天皇娶穗積臣
 等之祖建忍山垂根之女名弟財郎女
 生御子和訶奴氣王柱故建内宿祢為
 大臣定賜大國小國之國造亦定賜國
 國之堺及大縣小縣之縣主也天皇御
 年玖拾伍歲御陵在沙紀之多他那美
 也



本号一八

志賀里 いづみ 旧郡の遠海と云ふ

新古今

今より志賀の筑屋掃きたされし人其れ掃ふ里
神よいたたけの月不掃掃りしやいづる志賀の古里

掃政 大政大臣
平上徳意源

志賀浦 いづみ はやぶりの湖の浦と

拾遺

はるる志賀の浦風いづる公のうらたきしつる

右衛門督 公任

後拾

みるめさきあまの海をいづるあまの志賀の浦風

任督志賀 左近中将 良経

千載

極うひはれ山風吹きたるあまの志賀乃う波

八景 茶二政大臣

日

このよみて清し流のあせし後志賀の浦浪立そら

家隆

新古今

志賀の浦やをいづるいづるあまの志賀の浦

任督志賀 茶二政大臣

日

さう波や志賀乃う波風裏ては良のそら松小敷

茶二政大臣

新勅

志賀の浦にのよる浪そそそ天そらけいあまの

茶二政大臣 後藤

後後撰

いあまのほるは林よらるるの自ひとよはあまの

後藤 掃政

日

見よめさきたるは海士のいづる舟そそそあまの

河原掃政 左大臣

本巻一ノ九

新後撰

志賀の浦乃松吹風のさひまふ波千るもあま

掃大納言 公毎

日

志賀の浦乃松吹風のさひまふ波千るもあま

津守圓助

玉葉

志賀のうらや耐えて波る浪雲小の上の山そそそ

後藤 掃政

續後拾

あまの浦の山越そそそ波そそそ波そそそ

後藤 掃政

日

志賀の浦にのよる浪そそそ天そらけいあまの

後藤 掃政

新千

紅葉散りては山よ風ひけあまの志賀の浦波

刑部花房

日

けるあまの浦の小島の藤子よそそそ天そらけい

法寺定高

新拾

志賀の海の白ゆき乃波はうらやあまの志賀の

家隆

新後古

志賀の浦やあまの浦にのよる浪そそそ天そらけい

後藤 掃政

長等山 大伴三井古

玉葉

すの浦に長等のの山よ波は松吹る風もあまの

茶中納言 資實

新千載

志賀の浦にのよる浪そそそ天そらけいあまの

刑部花房

大津宮と今の大津宮の四宮の社内町の中にあり精大明神と松本

けあり小舟入あり松本葉が廣しう船中へ矢橋浦(まき野の)に
 ありこれをふねをたぬる唐崎の松本あり葉津城と見く帆風を
 まば帆に上り順更に矢橋浦着陸地ははま陽村の義仲寺
 其の朝日將軍義仲の塚跡跡跡をたぬるの境あり菊が廣し
 今の松本村をたぬる石山寺記云むく一宇多天皇石山寺より幸
 一給ふ時淡海の園司大伴の義とて之は淡小舟宮を志すとい
 ねこれ菊を裁く清草城答庭をたぬるは放よ葉が廣し又玉造
 の名あり大内裏の清とたぬる地をたぬるを焼畑進しける今に丸除
 あり膳所領の門をたぬる城下の所ありくろの幸多彦六万石をたぬる
 給ふ城あり御水へ秀て風色つら思原一町あり八丈龍神宮たの方
 小泉水寺新垣城をたぬる本此下に中進をたぬるありくろ八丈龍神
 の社あり中進をたぬる膳所領神左の方丸の淡小陽をたぬる清水吾孫
 若狭祀る田畑の社あり中進をたぬる牛頭天王稲荷社あり宮所小若

本巻一ノ十

後探 開越て粟津の社ありくろも信濃に是く一社ありくろ
 後拾 ありの社ありくろの爲角をたぬるありくろの社ありくろ
 新後拾遺 ありの社ありくろの爲角をたぬるありくろの社ありくろ
 新後拾 ありの社ありくろの爲角をたぬるありくろの社ありくろ
 新拾 ありの社ありくろの爲角をたぬるありくろの社ありくろ
 新勅 東海此のち此系ありの爲角をたぬるありくろの社ありくろ
 舊膳所ありの地名ありは新ありて山王系の新七日の園は五ヶ所の内
 頭屋をたぬる其家小猿の幕ありくろゆはく此者人乃十分一の初徳を
 文治をたぬるありくろの山門あり九十九浦の初徳十分一の神
 佐料ありてこれをたぬるありくろの粟津恒世成陽燿の兩人小受ありて

換子内親王系
抄律

源氏物語を書かんとす、新小牛と纏りの離物あり、海二ツありて、
傍の志願、一もや大般若経あり、式部が自筆、二十八社、
の落字あり、法華の十羅刹女、千手の二十八部衆、
式部が自筆、二十八社、衆部、
大日如來四隅の柱あり、二十七尊の画像あり、丹青妙處、
暮政子尾、暮経、
冷の親見亭、
あつと勢田橋の引人、
壇の地、
中央小弘法大師、
あつと八重桜と清教寺の、
後つらう古樹と、
たまふ、

何、聖徳文殊、
樟楓と、
あり、水、
杉、
飛出、
三所、
外の、
後、
石、
一、
許、
て、
こ、

鶴ヶヶと我々所履園と南山の麓に於て遺跡を尋ねて
昇天し終つて人杵山と天智寺に於て大津の宮に在りて
慶雲の佳瑞を以て聖蹟とありて其の時
らば其後聖武天皇良辨僧を以て引向て八葉の叢上小伽藍を
言万代の宝祚を護り勅教を授け給ふるなり

石山紀行

稱名院公條公 西三條

去年の秋乃に河内物部氏事などあれは遺物などありて二月
十日石山寺に於て武部が事なたりて昔の事或は
りて其の時を以て通集して二月月足結つて水
中て既小舟のひらけ像工は其の先の名跡を上りて
十五首乃奇ははきりて其の時を以て二月月足結つて水
中て既小舟のひらけ像工は其の先の名跡を上りて
より其の時を以て通集して二月月足結つて水
中て既小舟のひらけ像工は其の先の名跡を上りて

傳て續申一部の功なげむりて其の時を以て通集して二月月足結つて水
中て既小舟のひらけ像工は其の先の名跡を上りて
より其の時を以て通集して二月月足結つて水
中て既小舟のひらけ像工は其の先の名跡を上りて
より其の時を以て通集して二月月足結つて水
中て既小舟のひらけ像工は其の先の名跡を上りて
より其の時を以て通集して二月月足結つて水
中て既小舟のひらけ像工は其の先の名跡を上りて
より其の時を以て通集して二月月足結つて水
中て既小舟のひらけ像工は其の先の名跡を上りて

かの源氏の同て是をまゝあてあつて坊をたつて蔵をたつて世尊殿
 とて志すは東坊志人あまらざるべしとてあつて見せしむる
 あつてあつてししくよるべきをたつて海山見中あつて西にあり
 いづれそ又あつてあつて一に倉の坊とてあつて北の坊とてあつて
 如ゆるれあつてあつて一曾子に勝母の軍一車あつて漢高祖
 と相人よあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 島の名よあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 如の如くあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 又一体あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 系乃びあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 一連奇れあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 形のあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

本ある十四

あれは四人のあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 如の如くあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 ある時あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 よわはあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 理之仍あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 ての月のあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 そひあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 世尊院とてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 小あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 してあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 感あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

蘇十六首和歌
 南無如意輪觀世音菩薩とてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて



やまを
 走
 舟の
 家
 娘
 又
 春の
 風
 左
 袂



大津
 小舟
 入
 あり
 石
 湯
 の
 波
 にお
 お
 洗
 せ
 下
 伊
 勢
 舟
 の
 こ
 こ
 所
 の
 船
 の
 舟
 へ

かみさるあまの被ふり見して一糸のこゝろ梅乃と津風
 じしつふの空ありたふ被ふもあつたはるあまの
 くらもちの空ありたふあまのふらたはるあまの
 被ふれをばはるあまの被ふりたはるあまの
 いらは移る月ありてきかほのそふすあまの被ふれをば
 甲入まむとてはるあまの被ふりたはるあまの
 むし雪はるあまの被ふりたはるあまの被ふれをば
 くらもちの空ありたふあまのふらたはるあまの
 を被ふりたはるあまの被ふりたはるあまの被ふれをば
 せらるあまの被ふりたはるあまの被ふれをば
 被ふれありたはるあまの被ふりたはるあまの被ふれをば
 むし雪の空ありたはるあまの被ふりたはるあまの被ふれをば

梅乃出ふりかひや好の袖はる雪にそふたはるあまの
 はるあまの被ふりたはるあまの被ふれをば
 つまはるあまの被ふりたはるあまの被ふれをば
 世あらとてはるあまの被ふりたはるあまの被ふれをば

長業はるあまの被ふりたはるあまの被ふれをば
 むし雪の空ありたはるあまの被ふりたはるあまの被ふれをば
 くらもちの空ありたはるあまの被ふりたはるあまの被ふれをば
 いらは移る月ありてきかほのそふすあまの被ふれをば
 甲入まむとてはるあまの被ふりたはるあまの被ふれをば
 むし雪はるあまの被ふりたはるあまの被ふれをば
 くらもちの空ありたはるあまの被ふりたはるあまの被ふれをば
 を被ふりたはるあまの被ふりたはるあまの被ふれをば
 せらるあまの被ふりたはるあまの被ふれをば
 被ふれありたはるあまの被ふりたはるあまの被ふれをば
 むし雪の空ありたはるあまの被ふりたはるあまの被ふれをば

川小道志さわりありて今の中はもむねもえんをきかに
はきてわらじして結してね年終るあふ中うふたごの孫く
志うくせかしてわくのばらよもねねいぬれく行くよまてる城
見てはるいさねよもきく山の名を替ひてし水之ぬ人あね
あが佛をおもむとせ乃藤こゆふ孝のちち兒と
秀頼公は御母堂乃この世後の世は御移ひのこもほをねり
せ見ててあししくきううる教もむつ替りも月のみる
のひかりあひるるもいとなまにうゝ流るるひのぬひまわ
海とみれたまの毛橋も目のまこみこれ山雲程もくたご
ひとたもこ舟とばかりす教をやあふんゆふふいじ
のうゝ舟にわあふんゆふきあひ南にたももあまきと
ふすゝれも枝はねのうゝもよもねさうせうひごさひ
ごうのぬゝすはあゝれゝゝいふまゝもひのぬるるる

の物語も此毎しげよりあしひらて書もあつり定安つて傳れば
はもせごの中は傳もいづれもすゝれ人よるればるをいれわ
きういふもく見むしてまゝもいづれもいづれもいづれも長孫が
峯にゝもまゝの木の葉乃月夜よあまのの峯れ事には山を
いの世よわいけの世もよゝいづれも志いぬれとすごうご
傳もはれ人よもれうゝかろもて名のいづれもいづれもあもま
あすれひゝるおとをれ乃源氏の間との所ありてこれ
人ゝいづれもいづれもいづれもいづれもいづれもいづれも
とせ武治もいづれもいづれもいづれもいづれもいづれも
すわやうもいづれもいづれもいづれもいづれもいづれも
いづれもいづれもいづれもいづれもいづれもいづれも
うゝあゝいづれもいづれもいづれもいづれもいづれも
あゝいづれもいづれもいづれもいづれもいづれもいづれも

月夜心之妙よとほくらぬもさぬなりてたし

石山即事

長頭丸

秋風識我石山行。今日吹晴湖水平。比叡峯高懷寺古。勢多橋聳見虹橫。

石山紀行

澤菴和尚

有故人從故國來。十年不話亦親哉。洛中相伴尋佳境。關外勝遊自是催。坐出紫園向洛東。第三橋水更無窮。栗田口外數村末。逢坂留名關古宮。蟬丸曾引琵琶殘。澗水松風五月寒。關寺跡荒留礎石。小町今已淚攔干。太陽停午太津津。此處即是打出濱。風收雨細水無浪。萬境清湖一色新。

大江之南淡津森。常聞悲風怒濤音。吊古戰場思舊記。兼平寂後猶若今。渡景山田矢走舟。長橋卧浪勢多流。遙遠村路有層塔。此夕借房投宿留。

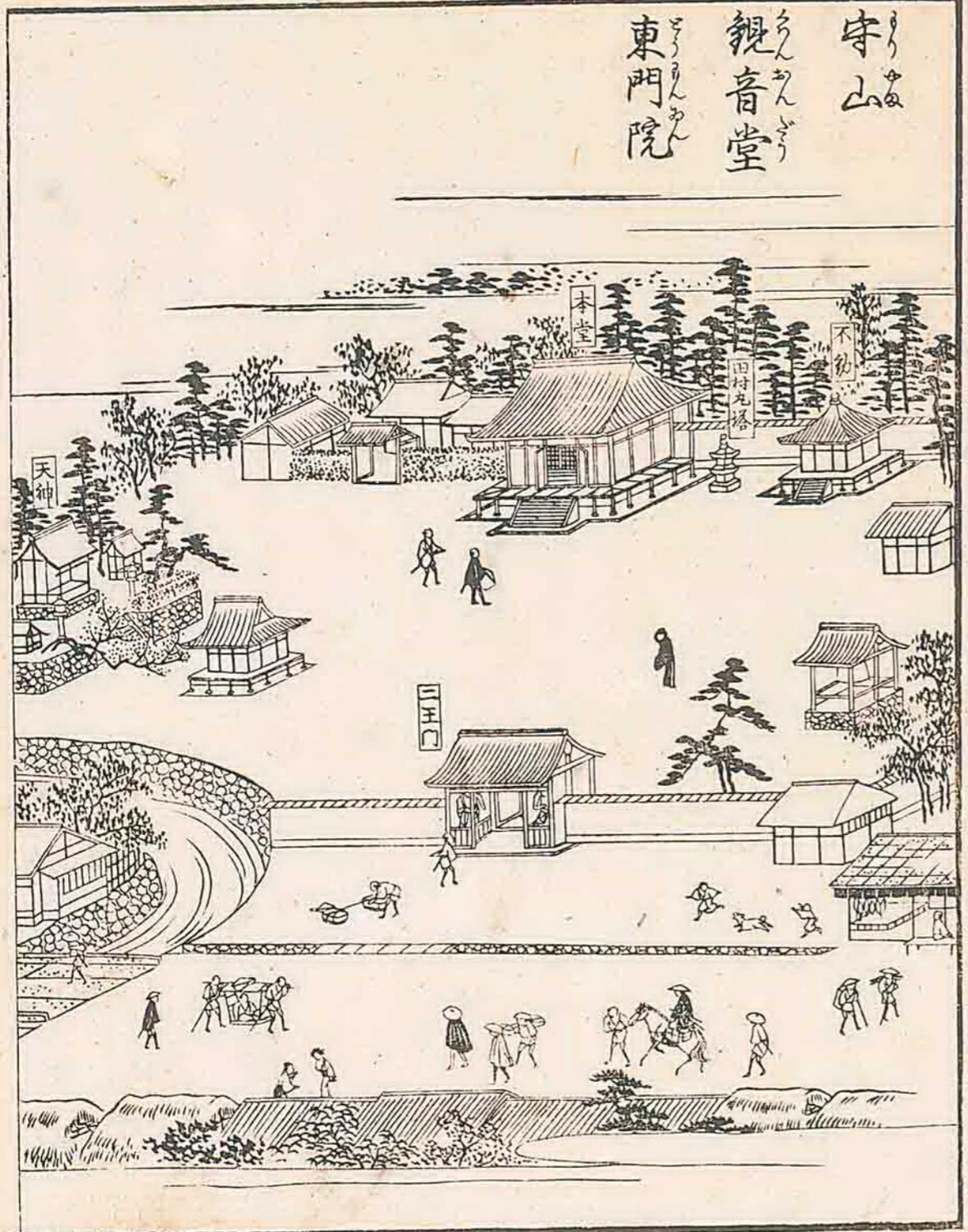


此處即是石山也。本尊者二臂觀音也。見此山致境。漫々湖水在前。洗肉眼。峨々岩石在後。轉塵心。溪水說法。山風談空。可謂上求菩提。下化衆生矣。往古者湖水窮而無下流。故今之觀音堂者古湖水汀也。怒濤顯山骨。如大洋海岸勢。奇右怪巖難盡詞。船繫岩釣磯。于今儼然寺僧詰之。鐘聲頻催暮歸。宿房吉祥院同宿者如玄南都玄齋兩翁也。院主茶菓點侍叮嚀也。山之

緣起靈寶無所殘披閱夜將過初更五月八日之在
 半天微雲遮之雖然菩薩之慈月明々物外而照被
 群昏誠不瞻仰之卒賦小偈
 歸命石山觀世音補陀剎界別何尋縱然天上被雲
 覆菩薩清涼慈月陰

○
 翌朝又伴院主入堂開紫式部閑居源氏間則上
 間掛式部之遺像本堂雖近年再興源氏間者古
 楹猶存以是為證云云聞說式部上此山則源氏
 六十帖浮漫々湖水上矣此證實不虛院主師弟
 携酒數刻有興玄齋法樂之音曲一聲皆人歌聽
 雖興未盡各下山又向舊路歸矣越不可無小詩
 叨信口云

守山
 觀音堂
 東門院



光源氏物語始斯山式部遺名満世間渡夢浮橋
縦歸去一輪明月照湖閑

下略

西三條公條卿園陀磨尼菴和尙の古た文をよみて中の道小海
あり痛茶作をねくむを瓜翁幻住庵の意孫國分寺にへく金樓園雅
の風籟松竹のつらつらの清水経塚と見ゆむ勢多橋小の所小橋長
二十二間大橋長九十六間高欄葱室珠絡と造智每ふ其年号と
橋と一名青柳橋勢田長橋ありの橋ももろろのつらつらと
よあり秀郷祠竜神祠と東橋丸あり雲徑寺これ瓜守の回上
不勢多の回上川の水源高峯にあり古神と号は地色をねく
初形を獲る後頼朝居の意初と回上とあり猿丸をまが暮は奥の
方曾末にあり勢田の所長一葉店後舎あり建教神の所あり
衆神大已貴命なり例衆と四月中午日地生去神と云

本名二九一

先行紀行

あけぼのやにさうて勢田乃ながけうもつらつらとあり
こづみけさうらにあまれぬの満整沙汰が比叡山とて
その水のをねみつてよはれり人老母のひ出さうて
こまゆくとねる初れ白波浦とてなまうて
ぼそ〜

屋の屋すひひして勢田の町と云ね此所の名を屋と纏規はひに
ありうるだも勢田とて奥の山流めて藻るあり味地郷小橋とて
よくねと姉とく短きなり規も亦あり〜味ひありこれより三間菜
屋砂川のせだ系なとて大に村小のれ大室新田を越さる右の
方又月橋の池ありとて濁り池辨天池月橋新田大の地菜を
と南芝村あり野路の篠原此も形と小玉川の形ありこれより玉
川の其一なり

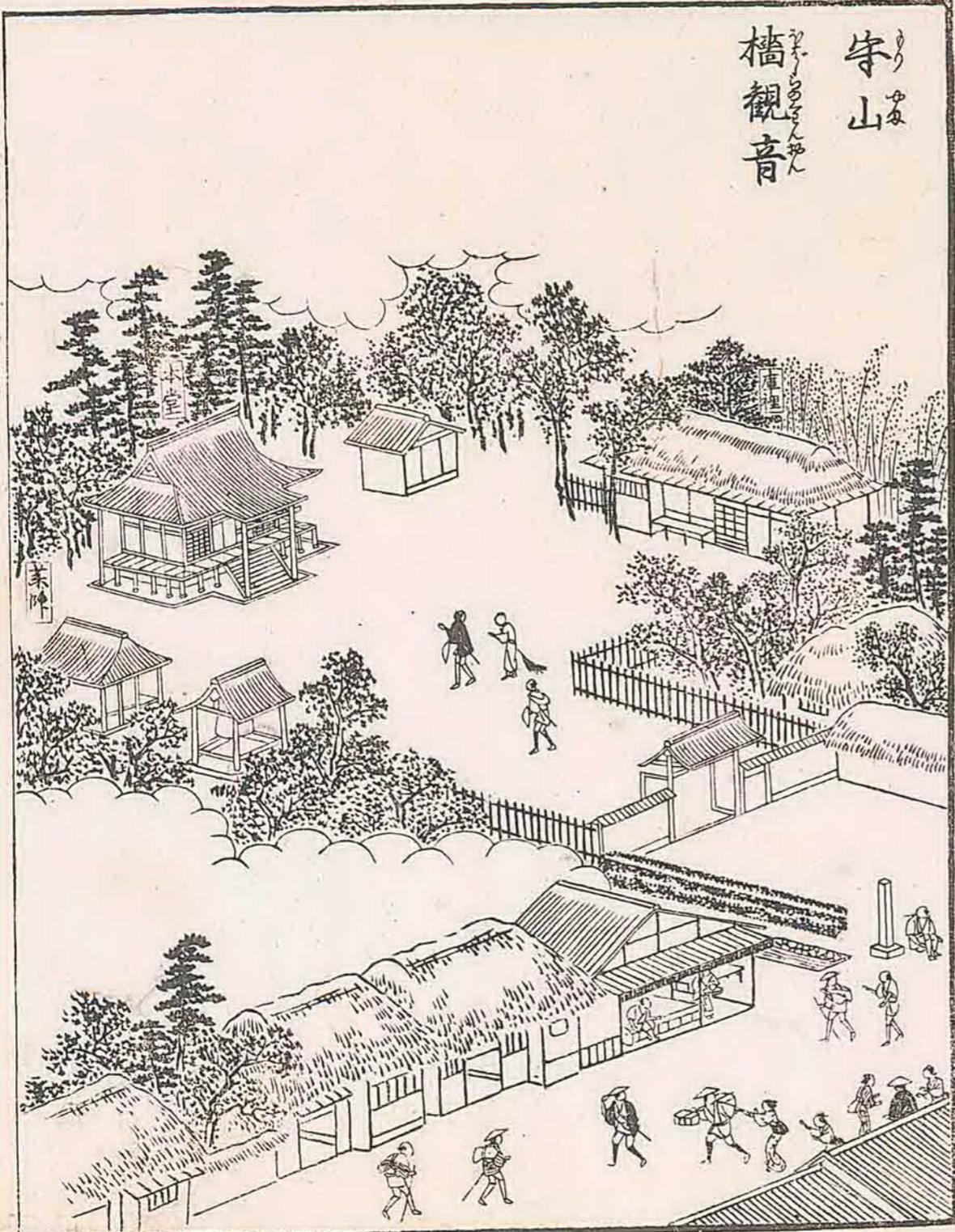
新後拾 こと麻のさうむ森小秋とて月も通なる野落乃玉川

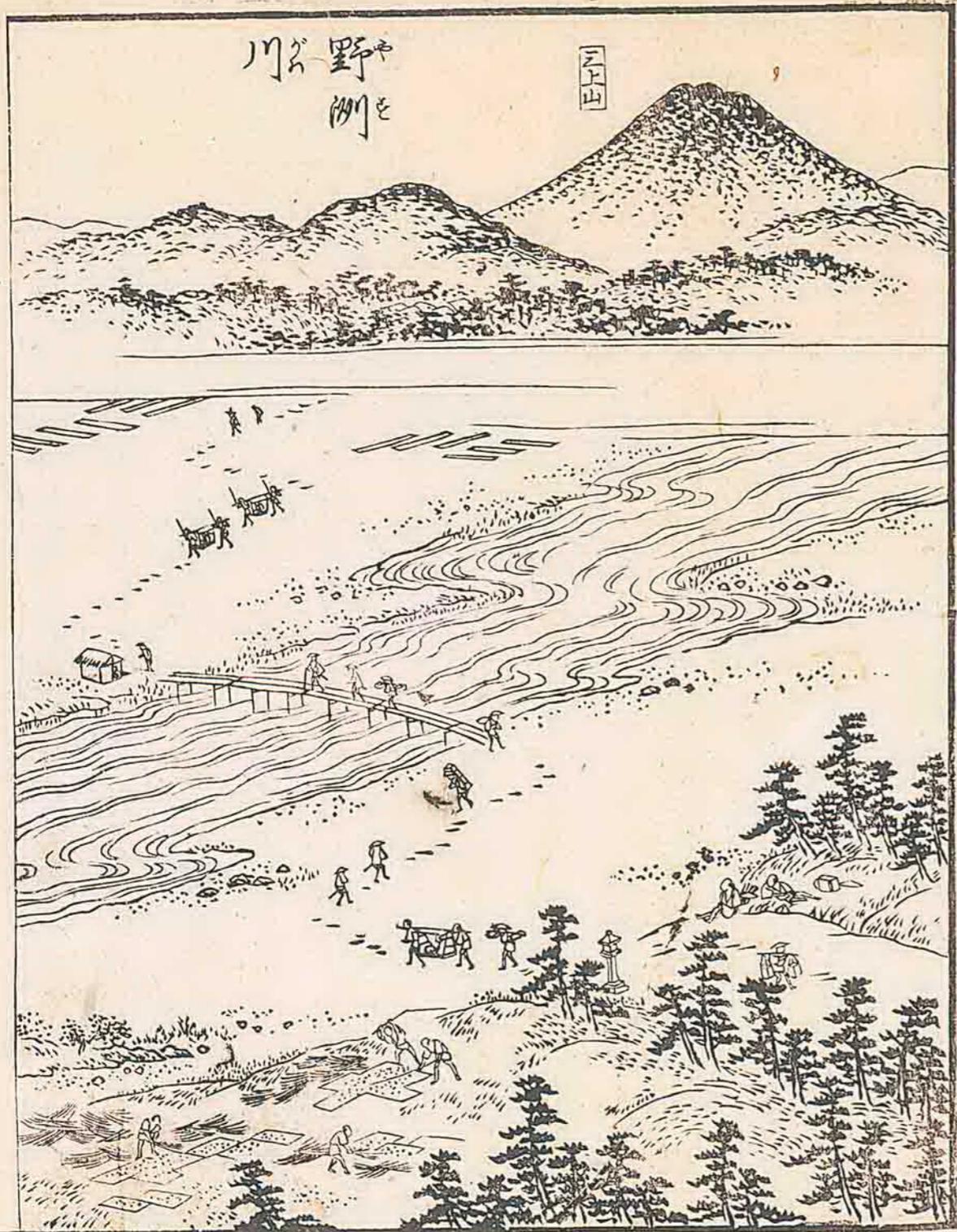
左幸持脚 仲光

此の地は、水鏡を記し、ひびくを、ふるまうと、は、みあり、水、
 里、寸、み、城、の、南、池、の、畔、に、と、く、く、い、つ、り、む、い、此、町
 み、り、あり、記、松、乃、む、く、ら、波、の、迄、志、到、つ、る、南、の、う、け
 城、に、つ、ま、ぬ、む、あ、な、く、て、ま、う、中、う、つ、わ、す、た、た、と、は、く
 に、入、ち、の、て、あ、く、ま、な、ど、お、ひ、ま、る、中、ふ、を、鴨、の、う、ち
 む、な、く、と、び、も、ぐ、ま、ぬ、阿、で、城、か、つ、中、う、之、蘇、と、り、旅、人、の
 し、も、く、に、し、せ、と、申、り、け、敷、が、今、を、打、す、る、た、だ、ひ、者、く、こ
 丸、居、も、ま、ま、く、ふ、成、り、る、と、夕、丁、を、う、わ、た、く、世、の、な、い、あ
 す、り、此、川、の、畔、に、ま、く、ま、く、ら、り、及、此、地、也

於、人、も、申、恩、果、と、判、り、あ、れ、の、と、は、さ、る、丹、後、の、藤、原
 野、治、の、藤、原、氏、と、り、ふ、お、よ、新、宮、御、神、の、中、後、十、福、も、川、矣、念、の
 所、ふ、い、つ、ら、ふ、う、む、ち、や、と、て、名、物、阿、ち、ゆ、ま、い、人、と、い、ふ、ま、ま、
 よ、新、け、新、橋、う、り、矣、橋、の、つ、く、は、中、で、廿、八、間、矣、走、小、鞭、寺、八、棧、宮

守山
 檣観音





草津

中々一海一海あり系神と應神天皇たと神功皇后たと
 武内大臣天武帝の御宇白鳳四年二月十一日大中臣法麿勅を
 うけてあつた勅書に「草津に其後建久元年右大臣將頼朝卿上洛の
 時馬よりの報をあげての海一海といふ」と尋ねしに「報乞
 の名河の比村社檀再興もあつた」といふ故に「草津」に「報乞」
 といふ

守山まで一里半は東海道本曾路街道尾張道等候
 にはまを賑一宿中小立本の神の海一海上吾寺駒升氏
 が活人の等河の海一見よ

東海道東海道別は宿場れ石標あり右へ曲は東海道石
 郊の駅ふおる直道と東山道本曾路よりあつた中東海道
 名所園舎ふらうとせしめられぬ貝原氏の本曾路之記よ河か
 のと私補遺してまよふ

草津川 葦ふり橋あり森あり出水あり歩けりて之後此若き

修石水源を金勝谷よりかきく末に山田に七湖水に入

系津の狭野井が家井泊りて此の境小出と藤井村横川むす

是齋が山居あり和中散を奉りり此の川村を過り徳村小社有

大寶天王社 祭神 素盞烏尊大寶年中夜附りて附り小澤除

十二日生土子此中五ヶ村より頭を傳へ神あり七頭敷高居の

類大寶天王宮本社南向側小若宮十福降祠陸橋本社三石五

供物に所むり此の同魔堂村に同魔の像あり小若宮の像を

今宿村小若宮の橋よりありこれの栗右那野側那の標を

武佐中三里半高倉院附大尊會悠記方の

寺より西本願寺末のちあり蓮如上人建立之金を森より

け所は接しるる守山古歌に録ん

守山

本巻一七四

古今

志々森堂の海をいづる守山に下系神は色澤水も 貫之

千載

嘉應元年高倉院附大尊會悠記方の

皇代を系代の神皇にふ守山の名をこま 宮内省

新古今

志々森堂と記す守山の山にけし山よりあり 式部

續古

この頃八月に我りて守山系跡の本町の風 春後雅純

玉系

守山乃岑の系を教をわける此色のとくをみか 貫之

新後拾

人めをる山下に水に記の記を絶りて考法をせぬ 讀人志

史本

形く輝の波を記し守山の志けふ本に多露 為相

守山親音堂と歌中にある天台宗ありて東門院守山寺と号し

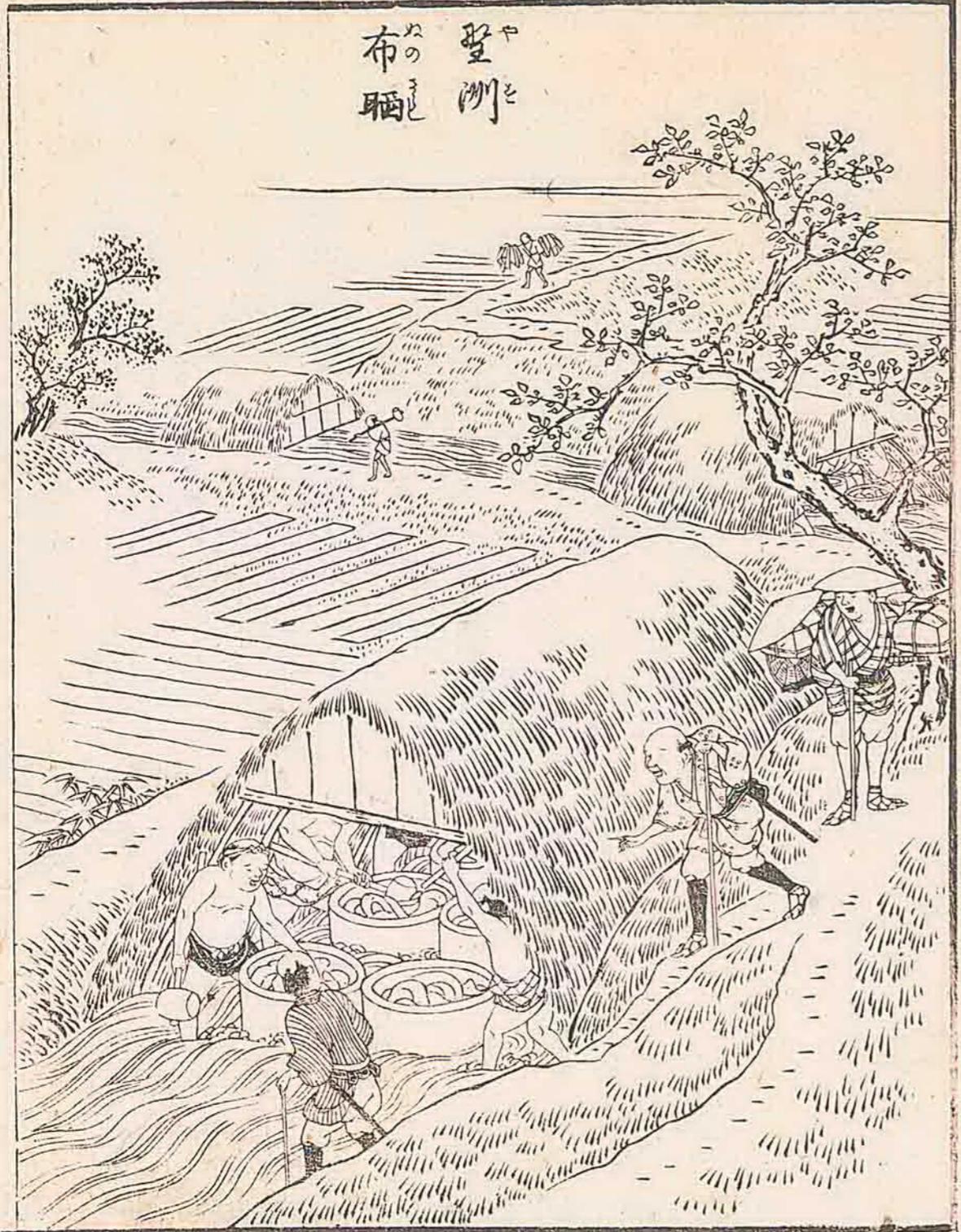
本尊 十一面観音 西條坂安ん延鎮の化

桓武天皇勅ありて田村將軍北建立之苗山とて古ありて

奉堂の側小田村塔不動堂あり徳寺の天満宮勅ありて門あり

二王坂安ん傳小鈞持堂あり

聖洲の布晒



帆柱観音の月歌中にありて天台宗ありて慈眼寺と辨ん

本尊ハ十一面観音長式尺許あり傳教大師入唐一帰朝の時

送風帆を翫し忽帆柱折れり物る處之降十一面観音念

ト難風暴ある事と祈せり後速小風波穏やかて帰朝

師く乃因茲其帆柱をりて之悲の像と化せり小安一かよ

野洲川 疎海道横田川の市をさす一なる若多一に至る句一

新助 昔も教みまればけと目よひての歌りてあすの河波

玉葉 旅人もみれば花ふあささくはうらわに中よりの川舟

新拾 わつ意とめさつわのあささくはうらわに中よりの川舟

母林 早苗とゆきあはれさあはれおの刈田のりりり

海道記 田中くもる民老打過けくはれおの農夫とまきまきあつ田を

くもる民老打過けくはれおの農夫とまきまきあつ田を

西よるけは守を存おのく小社とめはさくりの小河よる河ま

後集拾遺

安和門皮

延三位初夜

煮香

揚子風たちと響のまれ毛うちまひと折の編戸板垣
 糸花咲すさひと山時鳥志のひらくかてとこの嶽と眺
 て整例川をワレ

いふ引すむやん川の水よりよやくとくわくきやめ

御上神社

延喜式内名神太月以新尊地名三上村と書ん

祭神 天児屋根命

左若宮天照大神和魂を祭ふ
 右十禪院天瓊々杵尊を祀く

末社竈殿樓門あり當社と大むく孝靈天皇六年六月十

八日狹彦例祭と四月二申日若宮の神幸と九月十四日三上村

の生土神也て神武嚴守りり所社乃林園廣くして森茂り

給の者ハ類くく存現利生の畜跡もむとぬばとて一公再祭を

謹致すわくら成傾まげらとる吾應たりく人ぞ殊勝の文居

空思われらる

三上山

一名杖山ともて神社の上あり登路十八町鳥り五十町
 後小畑蛇山ともて郷の由縁よりひかりりなる絶嶺

拾遺

小八大龍王の祠あり毎歲六月十八日終王祭とて遠近來て登山
 千子振三上の山杖排をたさく人ぞはさる方代すてよ

日

兼代を三上代方よりくむやまの河水す我あひる

千載

これてなる三上の山杖排むく八百方代の志ありあり

後拾

雲霞さみうみの山杖風ふけ波きくつふ月うけ

彩後撰

玉接うらぬ色をちよとてみるのよぞとれらるき

日

はる本と成三上の山杖排むく

玉系

志如きの浦や付きて渡る浮雲小三上の山杖排むく

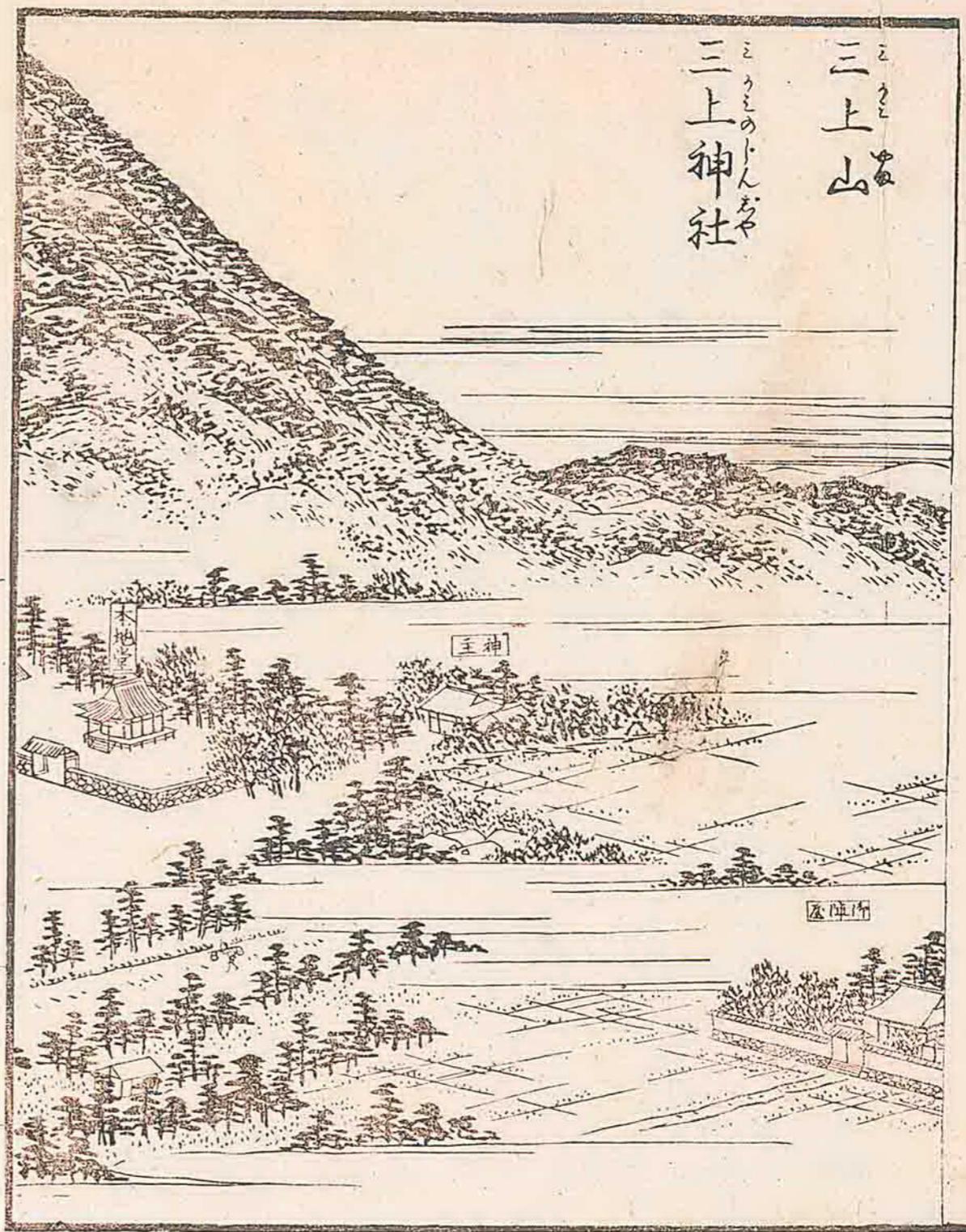
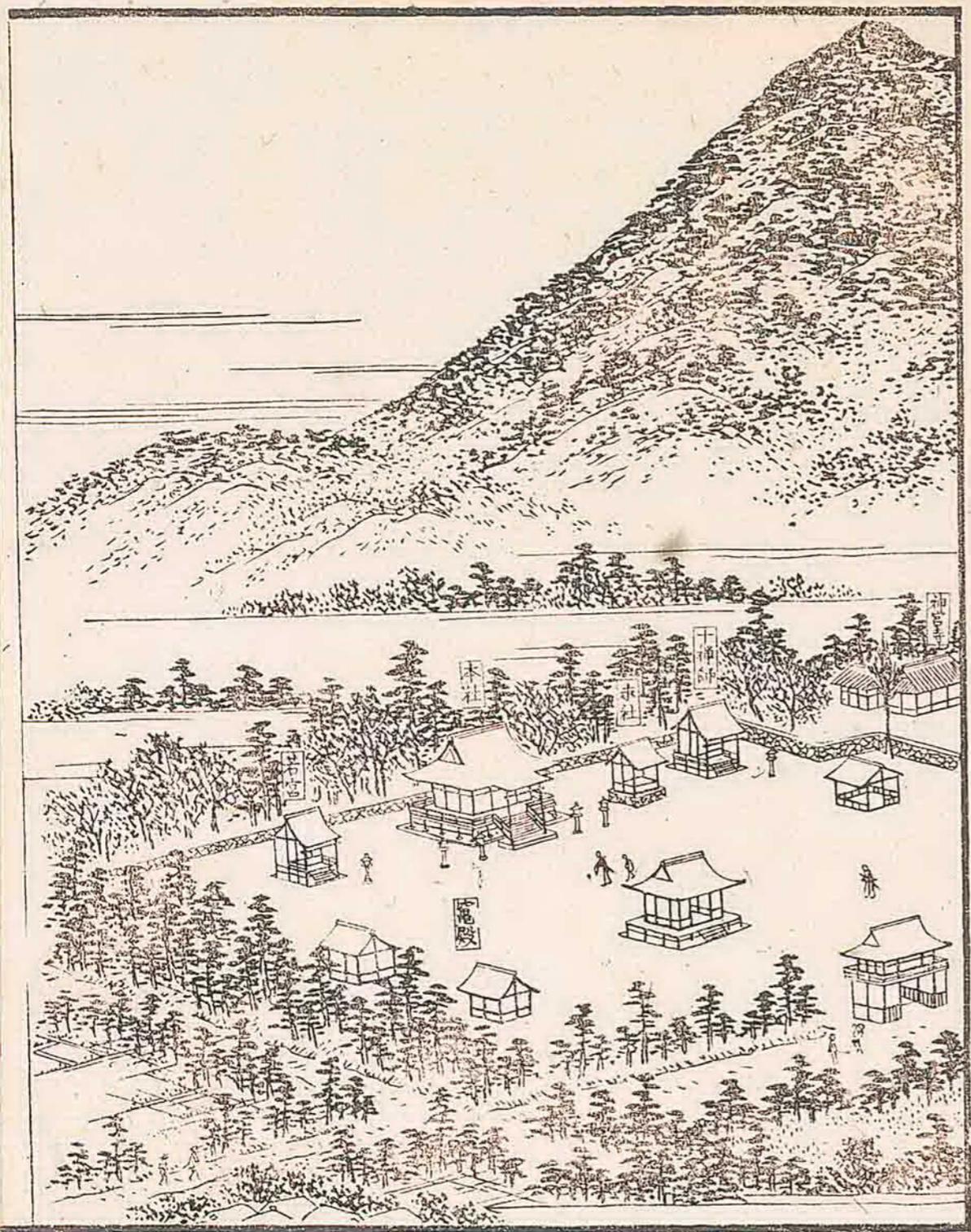
三上山杖排むく杖排をばさひ小篠原とて中へ出く願ふ比叡の

山三上の峯にむく富士の杖排むく三上杖排とて砂川ありおの

方小のりくをねとて傘は似る古松ありそれより桜もむくは

むく依るく矢棟川あり矢のむく材木大うらの金取焼くき

小堤とてく篠原堤とて大篠原に生を神あり又橋の名あり



三上山
三上神社

本多一ノ九七

藤原社 藤原村にありは前の子孫神と云
志のつらき藤原

白川七百首

新古今

これなるまの志の系吹風ふたひり人の社めふも
世中うらたう一奇志の系や核ありあせいのも愛せ

為家 後成

後古

長もふか風を志れ系や志る世ふ宿りし

後成

平宗盛塚 藤原村の海邊の塚なり宗盛の八幡の合戦に捕
まはれしを引ま加腹を初光終るもそれも腹しく病しく

通ふらめい

鞋不鳴地 海邊の地なりは地を宗盛首洗地と云し世に俗に毎
てくみ飛

あつる

鏡山 街道の右ふりて城人の祝身天日捨らる者日の鏡を収りし名付初
は商こくし陶人と移り陶を焼く今小土中より物後志を樂より傳るこ

古今

鏡山いごまよりて見こゆらんやゆらん老や志好ると

大付玉

日

あまのや鏡の山をまされむかひてせ見ゆるるふとせと

全

後振

鏡山や海にたつる志をれお系あり世にたつる

素性法師

拾遺

花の色とらやとらや鏡山まより後の志を見ゆる

坂上是則

本巻二九八

大藤原

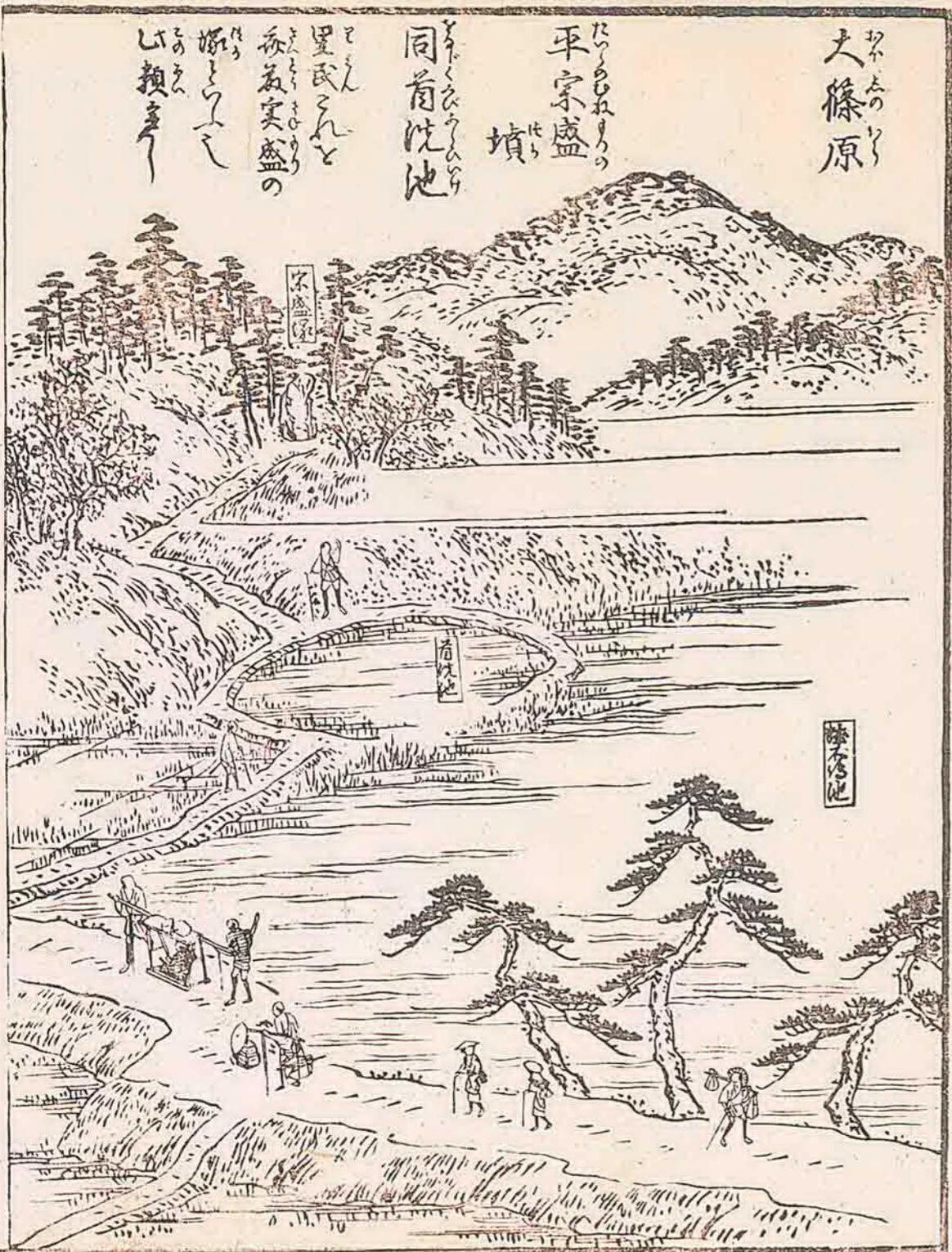
平宗盛

墳

同首洗地

里民と

極ま



全葉

新勅

新後撰

後手載

日

風雅

新拾

新後拾

可林

光の紙り

かみやうきより数月をたて置る数もるに数と毛れ

大森の幸次風小舟をたて置るに月もるの芳

ふそわかれた神乃法室に数とて向の鏡の心と瑞の月

鏡山日之巻物に数もるに月もるの幸次

ワの君のあまのけさあまの山と明の月とあつたの

岩戸あけ八咫のうたをたて置るに月もるの幸次

小月あけおの初尾ふたねも鏡の心とけふ情をり

鏡山とてあつた乃月もるに月もるの幸次

附の啼きれぬのうたをたて置るに月もるの幸次

ゆのみ乃あまのけさあまの山と明の月とあつたの

てよるける可れらちふみふのさよあつてはさゆへに

とけ事よとてあつたのうたをたて置るに月もるの幸次

と備ふとてあつたのうたをたて置るに月もるの幸次

たちよとてあつたのうたをたて置るに月もるの幸次

鏡宿

牛若丸

長者

十蓮

馬淵

東横園

西横園

八幡宮

土町村

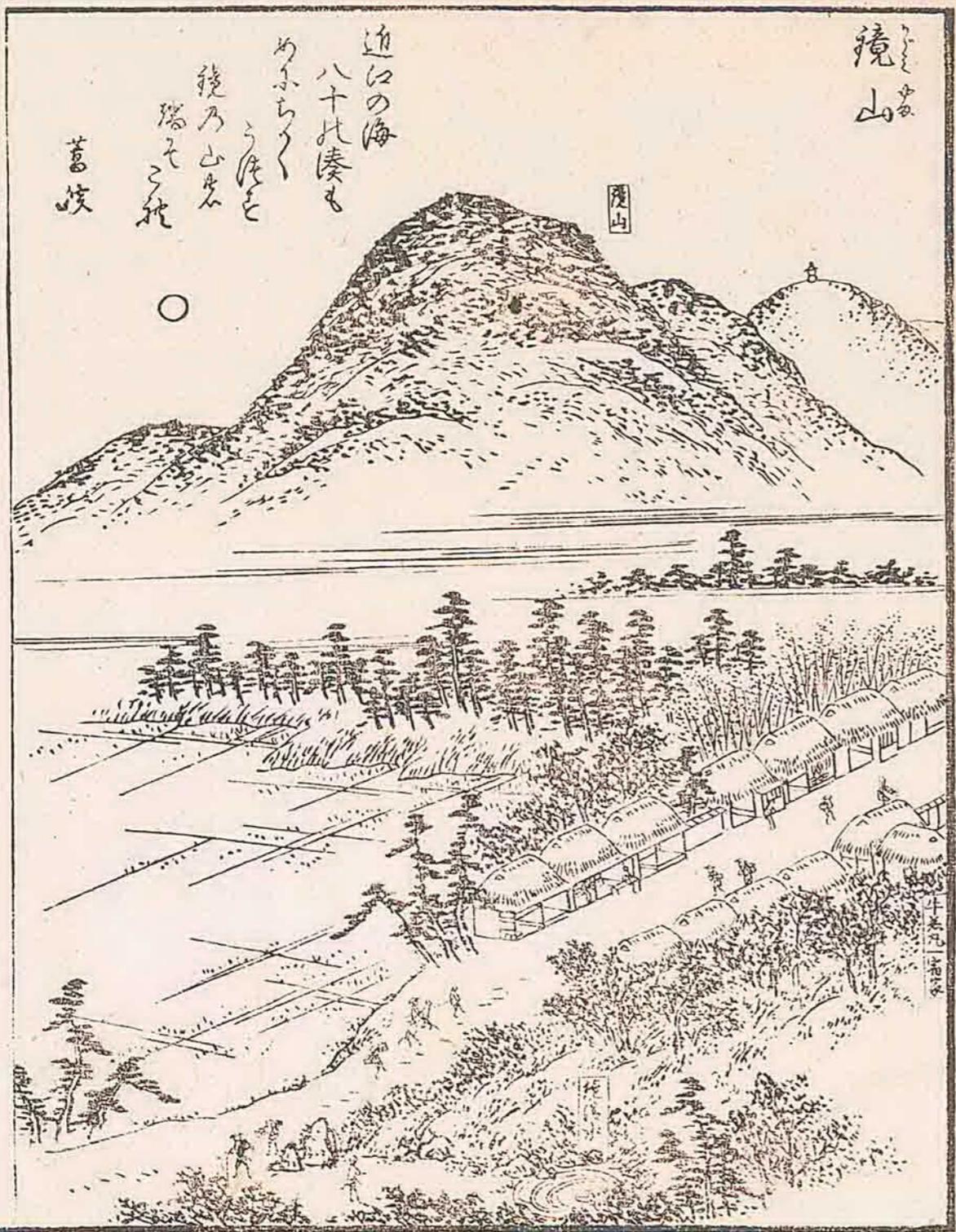
馬淵村

長者

牛若丸

鏡宿

十蓮



鏡山

近江の海

八十比隣も

めふらうく

うはと

鏡乃山名

瑞そ

葛岐

武佐寺

いりる寺が北山隈に武佐寺あり

本尊千手観音上宮志子の持念佛あり寺あり

女尾石より又八尺餘の香木あり尚寺むら

者これ所創に故武佐寺より平定没落の丹平重衛東

下これとんげ寺に魂ふ幸源平盛嘉記小見くあり

愛知川中下武里半これより西の方よりて八幡の町へ

仍道法五十町許あり

八幡は色の於舎北地より七町人多く産物と故幡地及び布袴

粵表園丸焼心薬蕪等あり

比牟禮社八幡瀨津嶋小あり延喜式

本社中央應神天皇左神功皇后右

天照太神社奉社の稲荷社奉社の若宮

田心姫神 比三神と

市井馬姫神 玉振姫元振氏

本巻一ノ二十

大嶋社二前日新小神樂殿奉社の左の方拜殿あり
樓門傳へ云賀茂甲斐の郷ありて等都都祥祥あり
島居類基時卿の筆あり持明院大納言

其外末社多し畧之

夫當社の鎮座と原由小社傳云人皇十三代成務帝高穴穗
宮小あり即位の沛時武内大臣小命ト此瀨津島も於る
大徳を神と祀じむ厥后神の告より八幡宮成殿鎮
なれ天慶年中平将門退討の附六孫王經基公系統ありて
祈願とあり直小賊敵亡びぬ因茲山小移り大幡八幡堂
稱し八月十五日創祭と行ふ物に陽成院の沛宇天下早魁の
附徳雨を祈る小速く靈應ありとあり毎歲三月十五日御言
垢舞の神事あり天曆の比より依々本家比國より傳るより氏の神
と崇信し神領五百餘石を寄附し生土三十餘箇納と納る

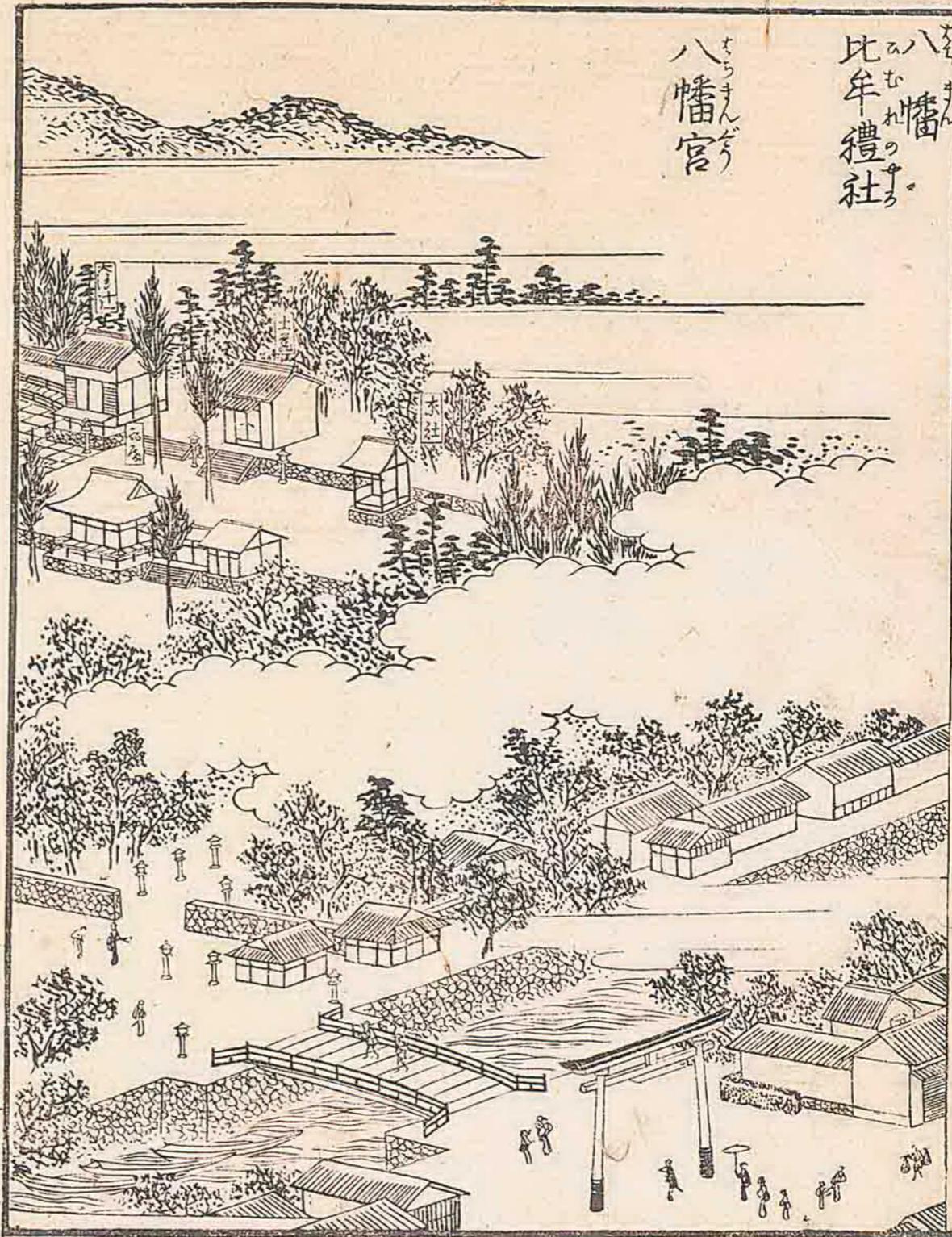
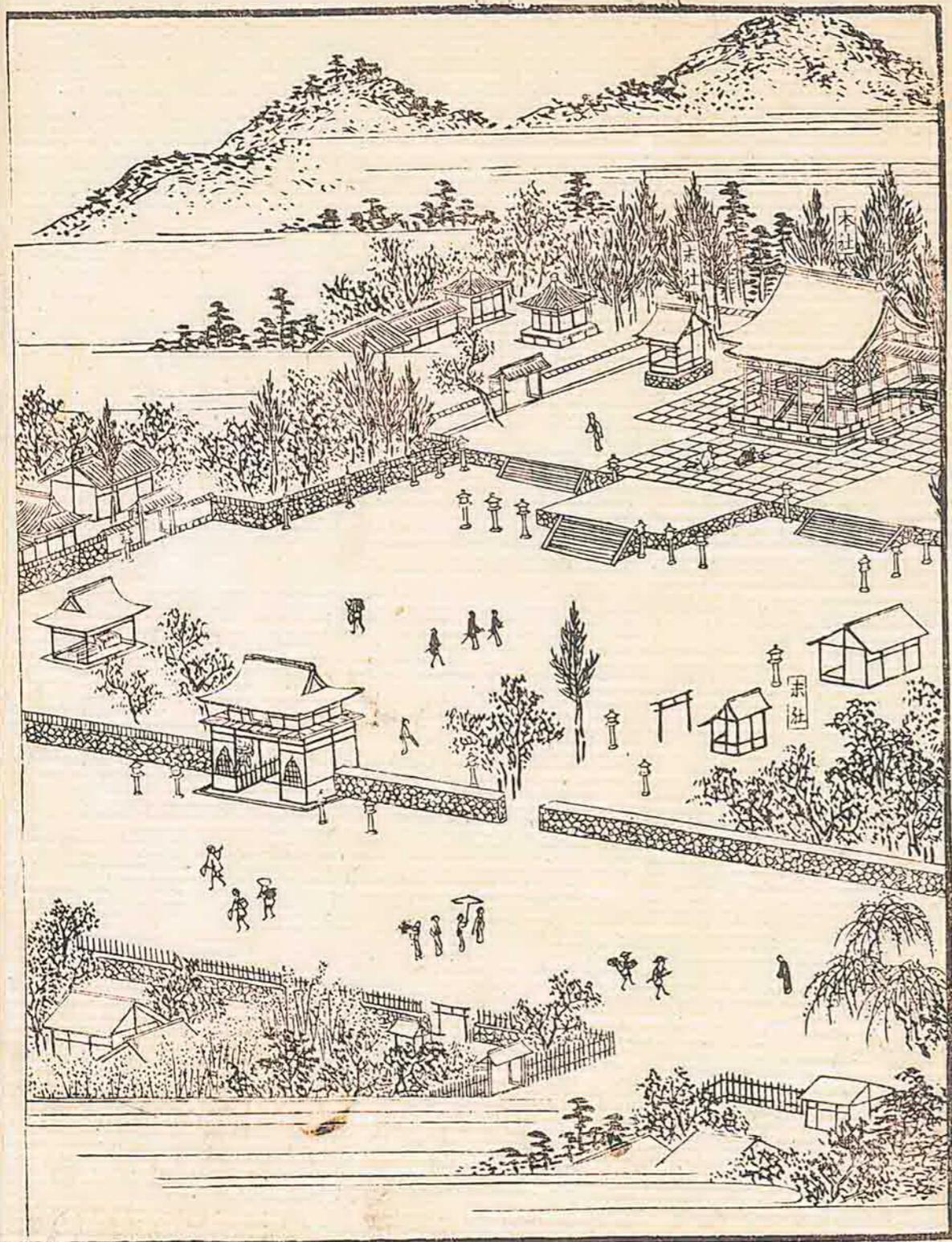
本巻一ノ九一

神威光耀より長徳三年より放生會成行り寛弘二年五月
藤に一社城勅傳りて下の社と稱し弘安中より崇古藝ひあり
奉幣あり忽神風小退れと海上めて亡びぬと傳り早霜重なり
永祿十一年九月信長公の薨小退り國作と本家十八箇納一宮
減り六神社も此時大小奉幣して終小終り其頃豊臣秀次
此小城を築たりが幾程あり文禄四年に亡び慶長五年にあり
平天下とありより神殿と再興し齋觀ふふ其後寛永廿二
年因東の令にありて神領五十石神職の除地を賜り神徳と處
りてむり小宮より靈結つちとありて是なり

八幡山十景和歌序

小村季吟法印

卯月の十日あり此山の八幡宮乃神ワにさうてゆりて
りけさけらゆり里小八幡とありて其神の志新をせり夕
はさ形まは鐘きとあり尾上よの月ありのまのうとあり



八幡宮
 比牟禮社

本居ノ世二

たふく信るるはつらんふれは妻はなごあるあへのまきやうの
も見ゆあふ守夕日れ教ふまよは此のな妙く書かざる
鴻はくはあふれきありまのあまに今ひつらたぬと茶
あを救きひつ書乃中これ系むきたてふは面をここと花回
なるつれの森にう深きおとや年々帝人のけいひ海士のけい
すふもてくこれ系むすむひはすづたふあふれけの可討
あやふくしてひひくくびぐにさむふか親善寺夜三山ふ
つり三十三その一とて落ぬ人そ神をこぬてよとて海邊なる
安去のふまのそとぬありなる惣見寺こを故信長の神と遠系
山下清とぬくはせたまふあふりぬを林乃月の本をれ者
のえれるとて見せぬありき存色よのり年進ば中あうにこ上の
ふれびひえと本の写小はこくまねと鏡乃ふもりぬぬの座
乃八の美系にふくはとて十は系あをいつくたふ

見通さんとして其夜筆を都の山ふありは豊浦之根乃
系并れ末にあるる名よやふひふとて此國のあまふあふ上
ゆみふたりと我し何れなる兒持するすだいつくぐややと可
あはよみふでるとたあふれぬとそあををゆひふとあうてむ
たど志あふくよ中をせれをすぶるく

知りしれ十のあやわけ山の信文の林に信けりて
まきけつてあふ甲ふはとこふ名系小神の志けりみる
十葉のうちハ膝晩鐘
まき

長命寺

長命寺山中庄の上ふありハ膝より五十町并
西園巡礼三十一表の札所

奉尊

聖親音 聖徳太子の

水笠岡

八幡の南の墨山をのり葵神の
吐膝の南の墨山の園とてや

水笠は雲の中ふ妹と何れとてのねまの雲たつを
あふれの雲乃葛系を魚舟て今船うぬれ林のま風

後後撰

新後撰

玉系

日

後後拾

新干載

日

日

新後拾

日

新後古

鹿心五七百首

日

水茎の思は清茅の菴を乃婦めとや秋寄とつらん
水徳院

あふれ思乃志藁とあぬれむ里の志と杜風と吹
定 森

つらぬ思く形よりあふれ思乃首寄とあけふあ
人 丸

いふ思くまはふいふ思水茎乃思由の思水茎乃思
乃 森

は思ひ思人よとせよ思水茎乃思由思水茎乃思
希左大臣

伐の思思思思思思思思思思思思思思思思思思思
後三任
乃 志

水茎の思思思思思思思思思思思思思思思思思思思
藤原信長

あふれ思乃思思思思思思思思思思思思思思思思思思思
六条院入臣

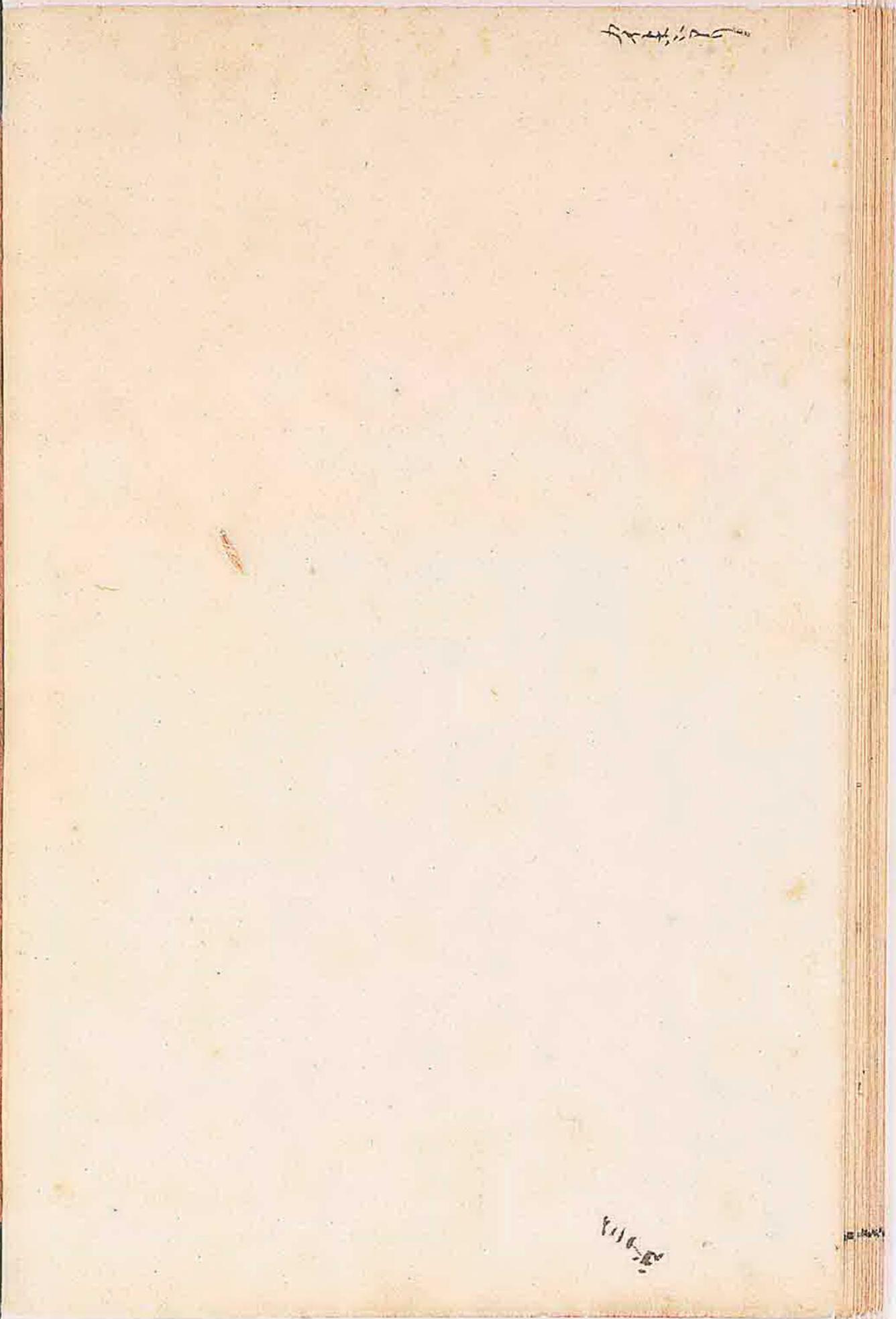
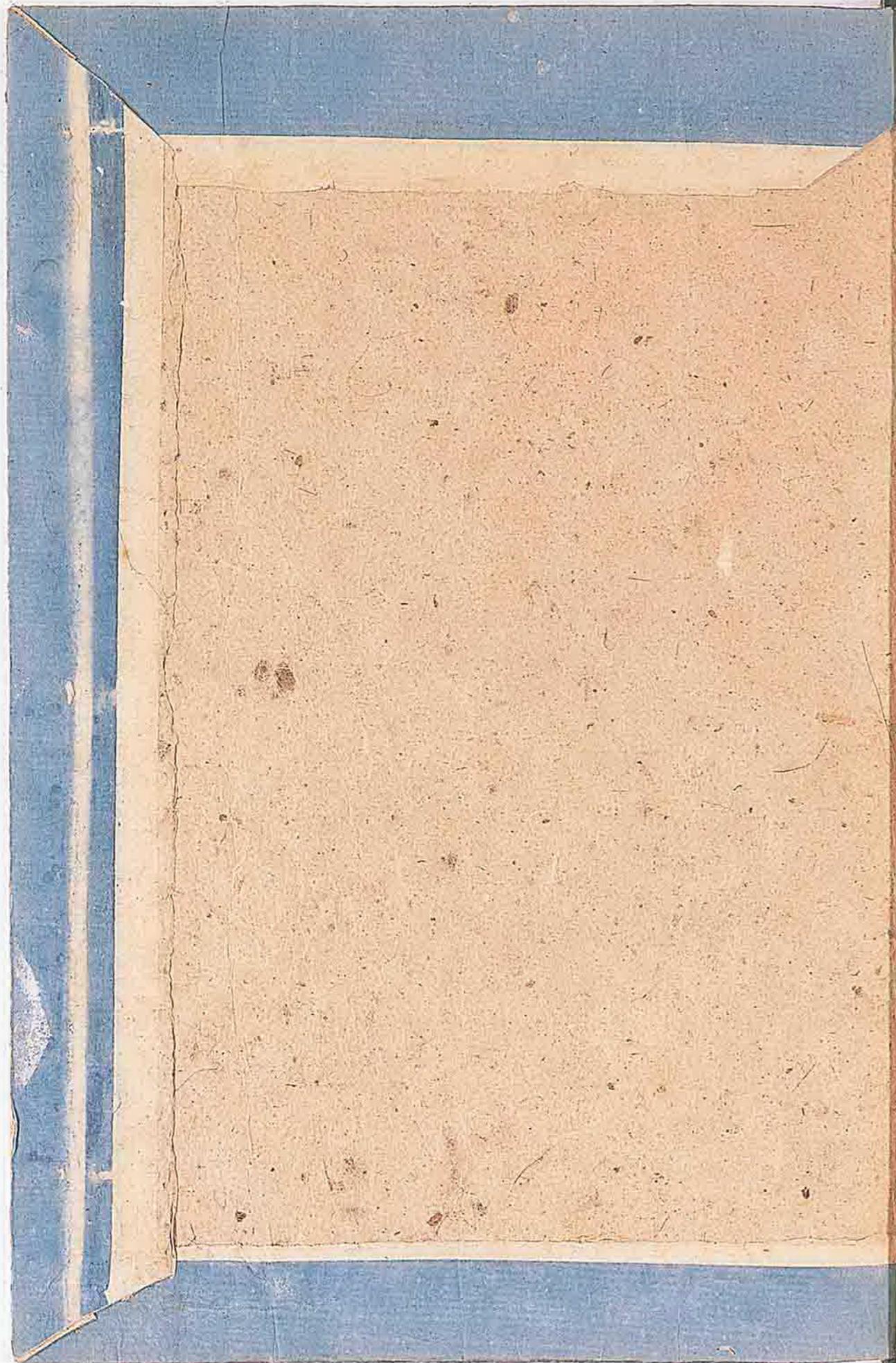
水茎の思思思思思思思思思思思思思思思思思思思
平常院

幾思ひも思思思思思思思思思思思思思思思思思思思
後一和首長

あふれ思思思思思思思思思思思思思思思思思思思
持中御云
乃 志

思思思思思思思思思思思思思思思思思思思思思思思思
乃 定

水茎の思思思思思思思思思思思思思思思思思思思
伊 製



Handwritten text in the top right corner of the page.

Handwritten text in the bottom right corner of the page.

